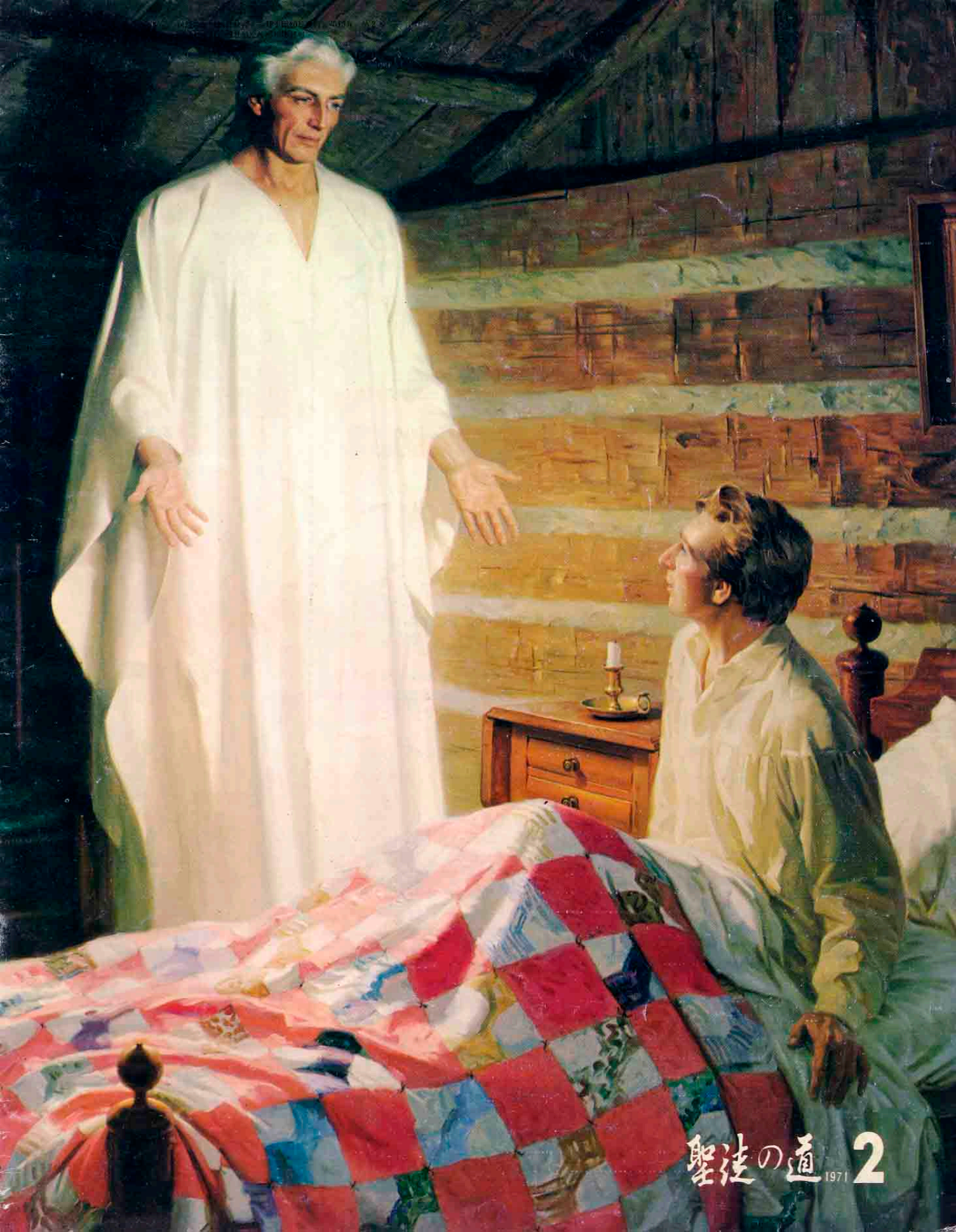






心の糧

十二使徒評議員

トーマス・S・モンソン

使 徒ペテロが強調した次の勧告に従いなさい。「……あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明のできる用意をしておきなさい。」(Ⅰペテロ3:15) あなたの声を挙げて神会の真なることを証しなさい。モルモン経に関するあなたの証言を宣べなさい。救いの計画に含まれる輝かしい真理を伝えなさい。

私はカナダに伝道していたある田舎出身の新しい宣教師のことが忘れられない。彼の体格は小さかったが、証は大きかった。彼は同僚と共に、カナダのオンタリオ州オシャワにあるエルマー・ポーラードの家を訪問した。二人が目も開けられぬ猛吹雪の中を戸別訪問して、つらい思いをしていた時に、ポーラード氏が二人の宣教師を家に招き入れたのである。二人は神のことばをポーラード氏に伝えた。ポーラード氏はみたまを受けなかった。やがて彼は二人に帰るように、また二度と来ないようにと言った。

玄関を出る際、ポーラード氏が長老たちに言った言葉には嘲笑的なひびきがこめられていた。「君たちが実際にジョセフ・スミスを神の予言者であると信じているとは思えないね!」

戸は閉められ、長老たちは通りへ出た。例の田舎の少年が同僚に言った。「私たちはポーラード氏の質問に答えていないよ。彼は私たちがジョセフ・スミスを真の予言者であると信じていないと言ったね。さあ、ひきかえして、彼に証を述べよう。」先輩の宣教師は初めためらったが、ついに同僚に同意した。

恐れで胸をドキドキさせながら、二人は先ほどひきかえしたその戸口に近づいて行った。ノックをし、「ポーラード氏に面と向い合った苦しい瞬間に、力強く『みたま』によって証が述べられた。「ポーラードさん、あなたは、私たちがジョセフ・スミスを本当に神の予言者であると信じていないとおっしゃいました。ポーラードさん、ジョセフ・スミスは確かに予言者でした。彼はモルモン経を翻訳し、天父なる神と御子イエスを見ました。それは本当です。」

ポーラード氏、現在のポーラード兄弟は、その後しばらくたったある神権会に立って語りました。「あの夜、私は眠れませんでした。くり返しくり返し、『ジョセフ・スミスは神の予言者です。それは本当です。本当です』という言葉が聞こえました。翌日私は宣教師に電話をかけました。証と共に語られた彼らのメッセージは私と、私の家族の人生を変えました。証をもって真理を教えなさい。」

もくじ

予言者のことば

結婚の神聖さ	大管長 ジョセフ・フィールドینگ・スミス	29
あらゆる人が証をしたこと	デルバート・L・ステイプレー	31
みむねのまま行かん	編集員 アルバート・L・ゾベル, Jr	33
あれからの十年	ベティー・マクマリン	35
モルモニズムとの出会い	ロバート・L・キャノン	36
ペルー地震と2人の宣教師		37
覚えの書は厄介な書か、つまらないと考えている人々へのアプローチ	ローレンス・W・ランド	38

主に受けいれられる犠牲

管理監督のページ	オウエン・キャノン・ベニオン	40
----------	----------------	----

人生のチャレンジ

愛の冒険	ジョン・H・バンデンバーク	43
------	---------------	----

教会の大管長

感謝の心	キャサリン・ケイ・エドワーズ	44
------	----------------	----

伝道部だより

結婚生活のマナー	H・パーカー・ブラウト	48
----------	-------------	----

裏表紙

子供	リチャード・L・エバンズ	5
----	--------------	---

「笑わせっこ」あそび

	バーナディン・ビューティ	6
--	--------------	---

2月のこよみ

4日 1831年

エドワード・パートリッジ 最初の監督として聖任さる。

9日 1800年

ハイラム・スミス パーモント州タンブリッジに生まれる。

10日 1851年

ハワイにおける最初のバプテスマ

12日 1954年

オゲデン タバナクル デビッド・O・マツケイにより献堂さる。

13日 1841年

オルソン・ハイド エルサレムにおける重要な伝道事業に送られる。

14日 1835年

教会の回復後オハイオ州カートランドにて始めて十二使徒選ばる。

17日 1834年 最初のステーキ部がオハイオ州、カートランドに設立さる。

今月の表紙

1823年9月21日の日曜日は、福音の回復に先だつ大切な日であった。ジョセフ・スミス(初代)が天父と御子にまみえてから3年以上もたっていた。今や18歳になろうとしていたジョセフは彼の与えられた使命を果たそうと熱心であった。

「私はもう寝ようと思って自分の寝室に入ってから、全能の神に対してすべての罪と愚かな行ないをお許しになるように……お示し下さるやうにと、祈りかつ願い求めた……」(高価なる真珠、ジョセフ・スミス2:29参照)

その夜3回と翌日2回にわたって、アメリカの歴史上の予言者、兵士であった復活したモロナイがジョセフ・スミスに現われ、4年の準備の後に英語で著わされるという古代の記録について指示を与えた。それはモルモン経として知られるであろうと言われた。

長年の間、モルモン経が世に出た歴史的な出来事に関して、多くの画家が絵筆をとってきた。今月の表紙はトム・ラベル画伯の新しい油絵である。この絵は教会広報部の各地にある訪問者センターで広く用いられる予定である。

結婚の 神聖さ

大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス



非常に多くの人々が結婚を「死が二人を別つまで」共に生活する男女間の単なる契約または合意とみなしている。

イエス・キリストの福音に関する儀式の中で主の宮居で結婚することほど重要で、厳粛、かつ神聖、人の永遠の喜びに必要なものはない。それはまさしく人類の存在がかかっている永遠の原則である。主は福音の律法の一部として世のはじめから結婚の律法を与えられた。福音の計画の中で、結婚は永遠に続くべきものである。もしも全人類が全き従順をもって福音に厳密に従い、また主のみたまにより与えられる愛に生きるならば、すべての結婚は永遠なものとなり、離婚はなくなるであろう。

福音の計画の中に離婚は存在しない。それは人々のかたくなな心と不信から起こったものである。パリサイ人がキリストを試みようとして言った。「何かの理由で、夫がその妻を出すのは、さしつかえないでしょうか」。イエスは答えて言われた。「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と

女とに造られ、そして言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」。彼らはイエスにモーセはなぜ離婚を許したのかとたずねた。イエスが言われた、「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したのだが、初めからそうではなかった。」(マタイ 19: 3—8 参照) 神が結ぶものは永遠である。

結婚は、他の何にも増して多くの目標と祝福のある原則である。それは忍耐と愛の精神、さらに聖きみたまの力によりもたらされる大いなる愛の内に行なわれなければならない。結婚の誓約を果たすことほど着実に人を神の御国へ昇栄させるものはない。この誓約を通して、おそらく他の何にも増して、我々は御意の完全さにまで到達するのである。

もし適切に受け入れられるなら、この誓約は、人が最大の幸福を得るなかだちとなり得るのである。この世と来世における最大の誉、主権と完全な愛の力とは結婚の誓約から生じる祝福である。これらの永遠に栄ある祝福は、結婚の誓約に加えて福音の他のあらゆる誓約を喜んで受け入れる人々のために貯えおかれている。

主は人の幸福に欠くことのできないこの聖なる原則に関して、教会に明らかな指示を与えられている。教会には死をもって終ることのない祝福を人々に与える

儀式がある。末日聖徒が理解している結婚は永遠のものと定められた誓約である。それは永遠の昇栄の基礎である。なぜならば、もしそれがなければ、神の王国において永遠の増進ができないからである。

末日聖徒の結婚は、適切に行なわれる限り永遠である。この祝福を求めて神殿へ行く夫婦に受け入れられる結婚の誓約は、天父が与えられたからである。結婚は死をもって終らねばならないという大方を風靡している考えは、天父から出たものではなかった。それは真理の敵によりひき起こされた。そして彼はできるものなら、義の王国をくつがえそうと剣をふるってきたのである。この地上でかつてなされた最初の結婚は、死が世に来る前に執行された。死と離別という考えはそこには入っていなかった。

願わくばすべての末日聖徒の若人が、全身全霊をもってまことに神聖な永遠の結婚を望まれんことを、またすべての末日聖徒の両親が、子供たちに結婚の誓約の神聖さを教えられんことを。神の誓約を敬う以外に永遠の生命の祝福のうちで最大のものである永遠の結婚の祝福を受けることのできる方法はないことを子供たちの心に刻みつけよう。

もしも彼らがこれらの戒めに忠実ならば、彼らの栄光と昇栄には限りがないであろう。「……すべてのものは皆彼らのものなり、……彼らはキリストのもの、キリストは神のものなり。この故に彼らはすべてのものに打ち勝たん。」(教義と聖約 76: 59—60)



あらゆる人が

証をしたこと

十二使徒評議員

デルバート・L・ステイプレー長老

私 は教会の若い人が次のように尋ねたのを聞いたことがある。「神とキリストがおられ、死後の生活があり、人間は進化してできたものでないと、どのようにしてわかるのだろうか。」

この邪悪な、サタンのはびこる暗闇の時代は、若者の信仰を打ち壊そうとしている。それゆえに教会の指導者は、それらさまざまな形をとって現われる悪に強い関心を寄せるのである。

彼らは墮落した大人達が青年たちを混乱させ、「心を配って地獄へつれて行く」(Ⅱニーファイ 28:21 参照)と認めているが、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、そうする人々のことを「疑り深い製造者」と呼んでいる。

「疑り深い製造者」とは次のような人達である。

懐疑論者一神により啓示された真理を客観的に認識することの可能性を疑い、断定的に判断をさしひかえる人

不可知論者一神は未知であり、且つ不可知であり、神の存在は証明もできなければ反証をあげることもできないと考えている人

無神論者一神の存在を否定する人

疑惑者一既に広まっている神への信仰を疑い、信者の心に疑いの種をまく人

上記の定義にかかわらず、熱心な信者の信仰を壊そうとして間違った教義や行ないを教える人々は神のみ前から除かれるであろう。間違いをうえつけられた犠牲者たちは熱心な勉強と祈りを通して、正しい教えと導きを得ようと努力しなければならない。

賢者ソロモンは言っている。「あなたの若い日に、

あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がくる前に……」
(伝道 12:1)

今日、予言者を通して神により啓示された行為の標準に反する意見が多くある。これらの誤った考えが若者の信仰をかき乱し、実り豊かな、喜びと幸せな生活をもたらす道德価値、道德的行ないを転倒させている。

神と御子イエス・キリストの実在は聖典や疑う余地のない確かな人の体験による証によって、はっきり立証されている。

パウロは言っている。

「……すべての事がらは、ふたりか三人の証人の証言によって確定する。」(Ⅱコリント 13:1)

イエスは十二使徒に言われている。

「……おおわれたもので、現れてこないものではなく、隠れているもので、知られてこないものはない。わたしが暗やみであなたがたに話すことを、明るみで言え。耳にささやかれたことを、屋根の上で言いひろめよ。」
(マタイ 10:26, 27)

これはアモスに言われたことと関係がある。

「まことに主なる神は、そのしもべである予言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」
(アモス 3:7)

キリストの誕生と両半球における主の生涯と使命を予言し、復活後両大陸の使徒たちの前にお現れになると予言した証し人たちの声を聞きなさい。彼らの証に心を留め、ゆるぎのない強い信仰を育てなさい。

予言者イザヤは証している。「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。」(イザヤ 7:14) イエスは「エッ

サイの株から」(イザヤ 11:1) 出たと後にイザヤは言っている。

ミカは予言している。

「しかしベツレヘムエフラタよ、あなたはユダの民族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。」(ミカ 5:2)

キリストの誕生は、マタイ伝 1 章 18—21 節や、ルカ伝 1 章 26—42 節に記されているように予言されていた。

イエスについて、イザヤは言っている。

「その上に主の霊がとどまる。……彼は主を恐れることを楽しみとし、その目の見るところによって、さばきをなさず、その耳の聞くところによって、定めをなさず、正義をもって貧しい者をさばき、公平をもって国のうちの柔和な者のために定めをなし……

正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる。」(イザヤ 11:2—5)

救い主がまさに導きと教えをお始めになろうとしていた時、天父は天から「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」とイエスが御子であることを証された。

主の導きと教えを「疑り深い铸造者」たちは疑いをもってみたというより、主を単なる偉大な教師に格下げしたのである。私たちはこのような人々をどうして信用できるであろうか。救い主の存在を証する予言者の言動を知れば信仰厚く、英知にすぐれた聖徒たちは、そのような人々の言葉を当然退けるはずである。

最も信頼できる証し人たち、つまり、主が自ら選ばれ、親しく交わった十二使徒は、救い主の生涯、使命、死、復活を証している。これらの出来事は、古代の予言者と復活後に救い主を見た人々によって予言されていた。すべての人がこれらが実際にあったことを証している。

復活に先だって、イエス・キリストは使徒たちに欺かれないようにと告げている。

「にせキリストたちや、にせ予言者たちが起って、しるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。」(マルコ 13:22)

四福音書は、復活の後、イエスがマグダラのマリヤと、エマオへいく途中の 2 人の弟子と、エルサレムの閉めきった部屋にいる 10 人の使徒に御自身をあらわされ、また翌週 11 人の使徒と、次いでガリラヤの海で 7 人

の使徒に現われ、後に一度に 500 人の弟子と 11 人の使徒とにオリーブ山に現われたもうたことを述べている。オリーブ山において、「主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。」(マルコ 16:19)

十字架で死なれ、復活なさった後、イエス・キリストはアメリカ大陸にお現われになった。ニューフェイス書の聖句には主が人々の間にお立ちになり、近よって手足の釘あととやわきの傷を見るよう言われたことが書かれてある。主は十二弟子をお選びになり、全世界の人々に福音を宣べ伝え、神の王国をうちたてるよう言われた。主によって語られた人々は主がおられ、神の御子であると証している。

この末日に救い主と天父は、一介の少年ジョセフ・スミスの熱烈な祈りに答えられ、ニューヨーク州の聖なる森にお現われになった。後に主は、ジョセフ・スミス、オリバー・カウドリ、マーティン・ハリスに再びお現われになった。

1832 年 2 月 16 日、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンが死者について祈り求めていた時、主は彼らの「覚りの眼に手を触れたまい(教義と聖約 76:19)」彼らは御父の右に御子の栄光を見た。この栄光に満ちた示現を見た後、彼らは証している。

「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。

われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。」(教義と聖約 76:22, 23)

その証は、カーセージの牢獄に入れられた後でさえジョセフ・スミスの心の中に燃えていた。ここで彼は血で証をたて、殉教したのである。

使徒パウロは賢くも言っている。

「いったい、遺言には、遺言者の死の証明が必要である。遺言は死によってのみその効力を生じ、遺言者が生きている間は、効力がない。」(ヘブル 9:16—17)

証拠ははっきりとしており、証も確かである。すなわちキリストの生涯は予言されていた。主は神の予言者の予言通りに生きたのである。主は十字架にかけられ、復活され多くの人々の前に御自身をあらわされた。

神とイエス・キリストと福音の計画は永遠の生命を得るために必要である。

私たちは神の子孫であり、神が永遠なものであるように、私たちも事実、永遠なものである。この世の生活の後に来世がある。これは事実であり、もし永遠の幸福を願うならば来世に備えて準備しなければならない。私たちは一人一人、この目的を達成するために正しい道を歩まなければならない。救い主は言われた。「私は道であり、真理であり、命である。だれでも私によらないでは、父のみもとに行くことはできない。」(ヨハネ14:6)

神は御自身の形に人をお造りになった。イエスも天父の形につくられた。私たちの最初の親であるアダムとイヴもそのように形づくられた。同類は同類を生む。最初からそうなのである。馬は常に馬であり、その孫も同様である。同じことがすべての動物、その他の生き物についてもいえる。

人が創造主と天父の形に造られたことを知ることはどんなに大切で、高貴なことであろうか。

使徒ヨハネは言っている。「わたしたちは人間のあかしを受けられるが、しかし、神のあかしはさらにまさっている。」(Iヨハネ5:9)人は創造主より知識があり、賢いと思いはかることができるだろうか。

人が天父の教え、目的、裁きについて疑いを抱く時、それはやがて裁きの日に問われるところとなり、その誤ちは自分のとがとなって返ってくるのである。

私たちはこの世の生活を福音にそって生きなければ幸福になりえないのである。父リーハイの示現のようには鉄の棒に早くつかまることが何と大切なことであろうか。人々は教義についてさまざまな違った意見を持っているが、聖霊の証は、だれもが認めている。

まさに神は世のはじめから予言者をお召しになり、彼らを通して御心を啓示なさっているのである。

これらの真理と証が全教会員の心の中にしっかり植えつけられ、あなた方の証も、「神は生きたもう」と知るにより一層強くなるように。

みむねのまま行かん

編集員

アルバート・L・ゾベル, Jr.



快 活な若者メルビン・J・バラードは、故郷の町ユタ州ローガンのブリガム・ヤング大学を卒業したばかりだった。しかし彼の知識欲はなおも満たされず、彼はハーバード大学に進学しようと決心した。すぐにとというのは無理であったため、彼は2年間学校で教鞭をとることにした。教師として2年目に入ったとき、非常に美しい女性が彼のクラスの生徒として入ってきた。のちに彼女は彼の婚約者となり、共に彼のハーバード大学行きの計画を立てるようになったのである。

教師生活の終わる2週間前、メルビン・バラードはウィルフォード・ウッドラフ大管長より、合衆国内の大都市で伝道活動を開始するために、B・H・ロバーツ長老、ジョージ・D・

パイパー長老(のちの日曜学校中央管理会会長)の同僚としてその業に働くよう召された。それは彼の計画に打撃を与えたが、よく考えたすえ、彼は日没前に承諾の答えをもって教会の大管長のもとへと急いだのである。バラード長老は1896年6月17日、教え子であったマーサ・A・ジョーンズと結婚し、その7月6日、宣教師に任命された。教師をしてためたお金を携え、花嫁を家に残して伝道地へとおもむいて行った。

伝道の業に励みながら、ロバーツ長老は教えを説き、パイパー長老は歌い、そして当時23歳のバラード長老は祈り、説き、歌ったのである。彼らが伝道に召されて間もなく、ロバーツ長老とパイパー長老は解任され、バラード長老には巡回宣教師という責任が与えられた。彼はそのことで一晩中泣き

あかし、サタンは伝道をやめて家に帰るようにとそそのかした。しかし彼は主に助けを求め、夜明け前には元気を取り戻し、その任命を受けるという返事を出した。彼自身の、また彼のあとに続いた多くの宣教師たちの生活の導き手となった詩を見つけたのはこの時であった。それは、メアリー・ブラウンの著書「主をほめ称えよ」という小さな本の中の一節であった。

「山の上や荒れる
海を越えゆき
また戦の場にも
主は召したまわん
わが知らぬ道へと
呼ぶ声小さくも
主によりこたえつつ
みむねのまま行かん

主よ、みむねのまま行かん
海、山、野を越え
主よ、みむねのまま言わん
みむねに添いますん

主により語るとき
愛を語り得ん
罪の道に
さまよう人を探し得ん
主に導かれなば
道はくらくとも
よきおとずれを響かせん
み心のままに」(讃美歌 100 番)

それは彼にとって天からのみ言葉のようであった。そのような思いを持って生活していくとき、彼の生活はなんと喜びに満ちたものとなったであろうか。彼は1898年の12月、伝道を終えて帰還した。

その著者メアリー・ブラウンについては何も知られていない。何年かたってから、バラード長老はその詩に曲がつけられたことを知った。そして彼は教会のステーク部大会、特別大会などの席でこの歌を歌った。

そのメロディーは、福音伝道の仕事をしていたボストンのカーリー・E・ラウンズフェルが、ツイター(弦楽器)の伴奏で作ったものである。ある日、彼女の旧友に「みむねのまま行かん」の詩を手渡されるとすぐに、彼女はそこにあった楽器をかき鳴らしたのであった。のちにもう一人の友人が楽譜を書き、幾分修正を加えて出版されたのである。

バラード長老は実業家となり、ローガンのある団体役員となった。またいつも時間を見つけては教会に奉仕した。1902

年から3年の冬、アイダホのボイスィー盆地に散在する聖徒を支部に組織する際、彼は短期間の伝道の仕事についた。それから1909年の4月、36歳で北西諸州伝道部の伝道部長に召された。この召しを受けたことによって経済的にも苦しくなり仲間たちの中には彼をばか者扱いにする人々もいた。しかし彼は、払い切れないほど多くを主に負っているのであるから今の十倍もの犠牲を払ったとしてもなお足りないというのであった。北西部での働きは、1919年に十二使徒に聖任され、十二使徒評議員会の会員となったことにより終りを告げた。

1934年10月の総大会で、バラード長老はこのように述べている。

「私は後年、ハーバード大学へ行きました。すでに35年がたっていました。私は伝道部長を召すためにその町へ行ったのですが、大学はちょうど休暇中でした。その立派な建物の門に立って私は、希望に燃え成功を夢見ていた35年前に入っていたらと考えてみました。しかし私は肩書きや学位の真価をよく考えてみて、そのことに失望するようなことはありませんでした。また一方ではこれまで自分に起こったことを考えてみました。副監督、高等評議員として11年、教会の宣教師として14年、十二使徒評議員会の会員として15年、この栄光に満ちた40年間の生活。そこからもたらされる喜び、全智全能なる神の恩恵。もし私があがめているハーバード大学の肩書きや学位を得るために、従順であることによりもたらされる喜びや幸福を犠牲にしなければならないようであれば、私は生活を変えたくはありません。

私は次のような教訓を学びました。すなわち、主が私に望んでおられることをするということは、完全な最も栄えある生活を送ることであるということです。私は主が私に何を望んでおられるのか必ずしも知ることはできませんが、主は私のなすべき仕事を指導してくれる人々を召し、任命しておられ、彼らにしばしば靈感をお与えになります。それによってもし私が彼らの言葉に耳を傾け従順であるならば、私は自分が備えのできたものであることがわかるようになるのです」(1934年10月「大会報告」P. 117)

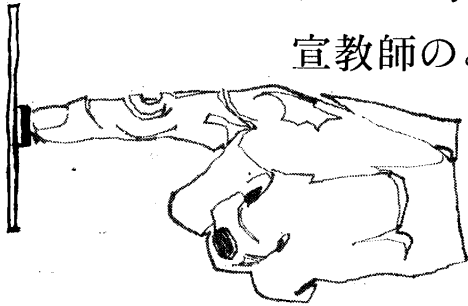
バラード長老は、1939年7月30日ソルトレーク市で亡くなっている。彼のこの世での働きは、彼が見つけた教会にもたらしたあの讃美歌に最もよく現われている。

最後の節にはこう歌われている。

「世の広き畑には
いやしき地あり
われ其処に主のため
はたらき果てん
主の愛を知りては
すべてをゆだねて
心の誠つくさん
み心のままに」

あれからの十年

宣教師のみなさまへ



ベティー・マクマリン



一 九月で、夫のフレムと私が末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になって十年になります。宣教師からバプテスマを受けて十年の歳月が流れたのです。

この十年はある意味では困難な、しかしすばらしい年月でした。

私たちが初めて宣教師の話聞いたのは、テキサス州ハウストンの南にあるのどかな小都市でのことでした。人々は二人の青年が帽子をかぶり自転車に乗って上衣の裾を風になびかせながら町中を走る姿をよく見かけては、くすくすと笑っていたものでした。

そんなある日、五月初旬のよく晴れた日でした。ふたりの青年が家のドアをノックしたのです。その時私がなぜ彼らの話を聞こうとしたのか。なぜ彼らを家に入れたのか、今でも不思議に思えてなりません。そのうちのひとりの青年が、2歳になる息子の遊び相手をしてくれました。息子は部屋にいろいろなおもちゃを運んできては青年たちのひざの上に積みあげるのでした。その間に他のひとりがモルモンのお話を始めました。私はモルモンについて、それまでに歴史の本でしか読んでいたことがありませんでした。

その時私たち夫婦は一応教会には出席していて、四人の子供たち（当時12歳、10歳、8歳、2歳）は最初はある教会、後に別の教会の日曜学校に出ていました。

おかしいことに、私は次の週も訪問して夫と話したいというふたりの青年の申し出を承知したのでした。しかし正直に言えば、私は夫が話を聞くとは

思いませんでしたし、私自身強い印象も受けませんでした。

それから一週間後、ふたりはやってきました。驚いたことに夫は彼らを家に入れたのでした。その時から私たちとモルモンの宣教師との交流が始まりました。私たちの心に教会についての良い種をまいてくれたのはこの二人が初めてでした。やがて時がたつにつれ私は自分が夫とかけ離れていると感じるようになりました。なぜなら、それまではすごい愛煙家であった夫が今はタバコをやめ、よく飲んでいたお酒をぶつ切り断ち、楽しみにしていた朝のコーヒーも突然やめたからです。そしてモルモン経をすみずみまで読み、心はすっかりモルモンになりきっていました。ところが私は違っていました。

この時にはすでにひとりの宣教師が転勤になって、代りに背が高く黒っぽい髪で黒ぶちのめがねをかけた青年が来ていました。ある日新しいその宣教師が冗談めかしてこのようなことを言いました。「あなたは一杯のコーヒーのために神の国からしめ出されているんですか」私は笑っただけでしたが、一週間はどして、彼の言ったことを真剣に考えるようになりました。

1960年の9月に私たちにバプテスマを施してくれたのはその青年と次に彼の同僚になった人でした。

彼らは私たちのことを心にかけ、まず、はうこと、次に立つことを教え、やがて私たちの手を取って歩くことを教えてくれました。はじめはよろよろとした歩み、そしてだんだんに速く、そのようにして地上の霊の子たちがみな

求めている究極の目標へと導いてくれたのでした。

彼らは私たちの心にある疑問に答え私たちの必要としていること、関心あることにこたえてくれました。幾晩もおそくまで教義について話しあいましたが、彼らはいつも正しく答えてくれたのです。彼らは、目の前にありながら見のがしていたすばらしい世界を私たちに示してくれました。

そうして、事態はゆっくりと変わっていきました。私たちが宣教師を必要としているのと同じく宣教師たちも私たちを必要としていることを知りました。そしてその時から、すばらしい青年たちとの長い交際が始まったのでした。私たちの家は彼らがくつろいでレモネードを飲み、自由に好きなことができる安息の場となっています。

宣教師たちは私たちの人生の困難期に力を貸してくれ、私たちが、敬けんな教会員であり、人生を健全に楽しむ民であるように教えてくれました。

十年前初めてドアを開いて以来これまでに大勢の宣教師たちを知り得なかったら、私たちの生活はいまだにつまらない意義少いものであったに違いありません。彼らは私たちにとって、喜びと幸福と知恵の源泉です。彼らふたりをとってみてさえ、あのような青年たちを持っている社会、国家は祝福されているとつくづく思うのです。

ベティー・マクマリン姉妹（テキサス州オレンジ支部所属）は、経験豊かな婦人記者である。教会ではさまざまな責任を受けており、4児の母親でもある。

モルモニズムとの出会い

ロバート・L・キャノン

1968年8月1日まで、私にとって「モルモニズム」は奇異な宗教であった。

モルモニズムとはシオンをユタ州と考える変ったいなか者の集団、ごくわずかのアングロ・サクソンの宗教だと考えていた。末日聖徒イエス・キリスト教会は多くの宗派の中のひとつに過ぎないと思っていたのである。またモルモン経も、ニューヨークの小利口な一農民が盗作か創作をした大それた悪ふざけに過ぎないと考えていた。私はモルモンの教義をよく知らずに自分の教会の教義とひきくらべて、どうまんにも両者の違いはさして大したことがないだろうと結論していた。

私は幾年もの間それと知らずに真理を遠ざけていたわけである。実際、今人が出会いと呼ぶものに接していながら私はそのことに気がつかなかったのである。

1962年の年、モルモンの宣教師が熱心に伝道をしていた。愛する福音を説明しようとする彼らに対して、私が示した反応は、おそらく氷のように冷やかなものであつて違いない。私は敵意を感じはしなかった。あの熱心なふたりの若者と交した討論よりはむしろ敵意の方が彼らにとって扱いやすかったことであろう。しかしながら彼らは一歩もひかず、二週間にわたった舌戦は引きわけに終った。そしてその後四年間というもの、私は宣教師にあわなかった。

しかし、その年月は無駄ではなかった。私は依然として教会で働いていた

が、満足感を得ることが少なくなり、数々の疑問がわいてくるようになった。三位一体とは何か。どういうわけで人は罪を持って世に生まれると言うのだろうか。死の意味は何か。権威の出所はどこなのか、教会？人？あるいは使徒信経なのであろうか？教会がいつも聖職者の給与支払いに四苦八苦しているのはどういうわけなのか。本からも人からもはっきりした答えの得られないこのような疑問が数多くあった。

私は他の教会の聖堂に行ってみることにした。また、神学校にも籍を置いた。私の疑問に対する返事はあったが、それは前と同じように難解で、さらに華麗な伝統の皮をまとった古びた答えでしかなかった。今考えてみるとそれらの疑問にあのようにこだわったことは、宣教師によってまかれた真理の種が心の中でふくらみ始めていたことの確かな証拠であった。

私の生涯の分岐点は、聖職界を離れようとして決意したあとにやってきた。俗世の職業につくことにした私は、内心手に負えない教会の壁には二度と近づきまいと誓った。

そうしたある晴れた日の午後、モルモンである友人の医者が、私をブリガム・ヤング大学主催の大会に招いた。会の呼び物は大学教授の話だということであった。彼は私とその教授の魂の出会いにはきっとすばらしいだろうとすすめてくれた。結局私はその大会に出席した。かの大学教授の話が進むにつれ、何とはなく三位一体というものについての疑問がみるみるうちにとけ始

めていくのに気がついた。その日、熱心なモルモンがいっぱいにあふれたあの大ホールで、私は天にいます御父を知らされたのである。私は御父が実在の、個性を持った、怒りや愛や喜びや悲しみを表わされる暖かな御方であることを知った。私は心を奪われてしまったかのようにぼうぜんとして会場をあとにした。しかし心には明るさが満ち、自分が霊的な出会いを経験したことをよく承知していた。家に帰りつくまでに、真理は私をとらえてしまった。一刻も早くモルモン教会の標準聖典を読みたいと思うようになり、一週間も待たずにもう一度ふたりの宣教師と話をし、長い討論をした。そのような間にも、私は自分の心に何か特別な平安と将来に対する希望がわいてくるのを感じていた。そして、その次の週私はバプテスマを受け、確認の儀式を受けた。

神と人に関する大切な二点を知るまでに、私は何年もの年月を費したのだった。そのひとつは、福音には何の防御も言いわけも飾りも必要ないということである。福音は出所さえさだかでない古くからの伝統や祭式によって誇張されたり神聖さを加えられたりする必要がない。福音は本来の意味を失ったためにじれったがっているのである。それは、はじめに述べられた時から、何の虚飾や誇張もなく存在し続けているのである。もうひとつは、福音に対する人の態度はまったくその人自身の問題であるということである。福音に対して、人は全幅の責任を負っているのである。

ロバート L. キャノン兄弟（カリフォルニア州イーストモントワード部の日曜学校教師および祭司定員会指導教師）は教会に加入する以前、プロテスタント教会の牧師の職にあった。

ペルー地震と

2人の宣教師

1970年5月31日、日曜日、激しい地震がペルー各地を襲い、特に大被害はリマの北およそ320キロメートル、内陸80キロメートルのアンデス山脈で起こった。以下の報告は、町中のほぼ90パーセントが崩壊したファラズの町で伝道していたユタ州バウンテフルのケント・トゥーン長老およびユタ州ルーズベルトのラッド・ウィルキンス長老から寄せられたものである。

5月31日、3時25分まではいつもと変らぬ安息日だった。ペルー、ファラズのアンデス山頂はうららかで、のどかな暖かい日和だった。私たちはひとりの人に教会のことを教えていたが、3時25分になると地面が揺れ始めた。ペルーでは小さな地震がよく起こるので最初のうちはさほど気にも止めなかった。ところが地震は続き、だんだん激しくなってくるので、私たちは家を出て落下物の危険のない通りに向かった。地震はなおも続き、建物全体が倒壊し始めた。やがて地鳴りがやんだので、私たちはようやく胸をなでおろした。

さっそくこの町に住む教会員らの消息を尋ねてまわったが、通りを出た時に自分たちが地震の間中一番安全な地帯にいたことがわかった。その通りは広く、両側にながらした建物が並ん

でおり、ひどく狭い上にほとんどの建物がアドーベでできている大方の通りと違っていただった。町の通りのほとんどは倒壊物で埋まり、そこにいた人の大部分は生き埋めになってしまっていた。

教会員を捜し歩いている間も、大勢の人が、けがをしたり生き埋めになっているのを見つけ、私たちはできる限りその人々を助けて歩いた。幸いなことに50人の教会員のほとんど全員が無事で、けがをした人は2、3人だった。のちに死者の出ない家族はまれなことを知ったが、教会員のこの数は実に奇跡としか考えられなかった。ファラズの死者は最新の統計によると2万人、すなわち5人に2人の割合であった。

夕方になって、私たちは自分たちの持ち物を取り出せるかどうか見るために家にひき返したが、驚いたことに家は倒れずそのままだった。中に入るのは危険であったけれども、私たちは、はいつくばって窓から入り、できるだけ多くの物を持ち出した。家が倒れてこないか、さらにはまた別の地震が襲ってはこないかと不安だった。大地震のあとには余震がよく来るのである。だがすべては無事に終わった。

すでに暗くなり、眠る場所もなかった。私たちは倒れずに残っていた

病院に行き、手伝いを申し出た。病院は決して忘れることのできない悲惨な光景を呈していた。けが人が次々に運び込まれたが、ある者は耳や鼻がかけ顔半分をもぎとられた者も多く、骨を折った者も多かった。そこにはあらゆる有様の負傷者がいた。病院の部屋と言わずホールと言わず人でうずまっていたが、町中で医者や看護士は2、3人だけだった。水も薬もそこにはなかった。私たちはふたり共まったくの素人だったが、申し出は歓迎され、徹夜で仕事にあたった。

その翌日、6月1日の月曜日は前日より状況が悪化した。がれきの山から何百人という死者が掘り出され、生き埋めになったままの人々もあった。私たちが助け出した人々の中には食物も光もなくわずかの空気だけで同じ姿勢のまま8時間も埋められていた少年もいた。劇場や人の集まる場所にはたくさんの人々が埋まっていた。

自然がわずか2分20秒の間にこのような状態を現出させるとは、実に考えられないことである。

ほとんどのものを破壊された町の人々は、みな嘆きと悲しみに包まれた。

いまだに多くの死者が放置され、不衛生な生活状態や質の悪い水のせいもあって、チフスの流行が懸念された。

覚えの書は厄介な書か

つまらないと考えている人への

アプローチ

ローレンス・W・ランド

そのため、翌日は経験のない私たちまでもテーブルを据えつけて、チフスの予防注射を始めた。その後数日間は、平和団体から派遣されたふたりの女性も含めて、友だちの家財掘り出しを手伝った。

地震後8日たって、私たちは40時間をかけ、リマに下った。その時までには病院にも大勢の救援隊が着き、ヘリコプターで食料や物資が届いていた。私たちの手伝いは無用になったので、清潔な衣類と暖かいシャワーが恋しくなったというわけである。」

地震のわずか5分前にペルーを立った十二使徒評議員会のゴードン・B・ヒンクレイ長老は、その翌日現地に引き返したが、被害の大きかった地区に住んでいたおよそ1,000人の教会員のうち、行方不明でおそらくは死亡していると思われる者が3名あるだけという報告をした。長老は、「5万人の死者のうち、教会員がわずか3名を失っただけですんだことはまさに驚くべきことです。私たちは本当に祝福されています」と語った。地震直後、教会は数トンの衣類、食料、薬品をペルー伝道部、リマ・ステーク地域の教会員非教会員に送った。

この悲劇に際してとった宣教師の行動を、町の人々はこう伝えている。

「グリングたち（北アメリカの宣教師の意）だけが町に残った。他の人たちは自分のことを思って町から逃げ出していったのに、グリングたちだけは違った。できるだけの人たちを助けてもらった」と。

レン・ケラーは、「先祖に奴隷を持たない王はなく、王を持たない奴隷はいないのです」と言った。家族の系図をさかのぼって調べていると、だれでもそのように胸おどる経験をする。知らなかった分家を知り、うれしい友情が芽ばえることもあり、必ずいろいろな旅行をするが、このような経験の醍醐味はいくら強調してもよいものである。なぜなら、系図探究は仕事、仕事と追いまくられることが少ないからである。

一般の人は系図探究者に対して一定のイメージをいだいている。まず探究者は、探究の相手同様な人だと考える。次に、探究者は暗い図書館の片隅にいるか、墓場で石のまわりをうろつくものと考え。しかし私はそうではないと言いたい。我々はエドガー・アラン・ポーのスリラーに出てくるような人物ではないのである。我々は必ずしも年をとっている必要はない。我々の1番の欠点は、自分のした仕事を、まるで「なぜあなたは自分の先祖を調べないのですか」と言わんばかりに、見せびらかす傾向のあることである。

しかし、では、あなたはなぜ先祖を調べないのだろうか。聖典を知り、昇栄についての教えを知っているあなたが。すべてのワード部、ステーク部に系図部門が設けられているが、私はここで、系図に関して新たな関心と呼び起こすために幾つかのヒントをさしあげたい。

第1に、小さなことから始めなさい。もしペディグリーチャートがめんどろなら、近所に住む親戚の家族の記録を作ることから始めるとよい。曾祖父がだれそれだということにかかりあわず、生きているうちに父親からあらゆることを聞くようにしなさい。まずあなたの手の届く身近なことを何でも知っておくことである。それだけでも1年や2年はあっというまに過ぎてしまう。そうして経験を得、本が厚くなると、自然に次の仕事の準備が整っていることになる。

人の傾向は普通次の2つのうちのどちらかに入る。1つは科学的な頭を持つ人で、このような人は数学にひいて家のこまかな修理を好み、活字のような字を書くことであろう。この種の人なら、統計の方面から系図に手をつけ

るとよい。

いま1つは文学の好きな人である。このような人は手紙を上手に書き、立派な2分半の話をし、話がうまく、たくさん本を読む。その人たちは伝記の方面から始めるとよい。たしかにこれらは大ざっぱな分類であるが、自分自身のことを考えてみるにより、苦労少なくして目的へ到達することができるのである。

統計から始めるとよいと前に述べた人たちにとっては、家族の記録やペディグリーチャートはいわば頭の栄養剤であろう。月日が違っていたり、関係が複雑であったり、正確でなくてはならないなどということは頭の刺激剤である。いったん始めさえすれば、「い」とこ、「町、県、国」、「結婚前の姓名」などはお手のものとなる。ただひとつの障害物は始めることなのである。

伝記から始める方法は、我々のステーク部ではまだ充分強調されていない。覚えの書の作成を急ぐあまりに、系図に関する才能をなくしてしまう人が多いのである。まず自分の家にある古い写真を集めなさい。高校時代の詩や大学時代の論文などをさがしなさい。3ヶ月間ていねいにつけた日記をまだ持っているだろうか。古い手紙を出して読み返してみなさい。そして、それらを参考にして書き始めなさい。その前に、自分のスケッチとして「思い出のファイル」とか詩とか伝記を作るとよい。ただひとつの障害物は始めることなのである。

系図には、あまりとりあげられない

一面がある。系図は楽しみとなり得ることである。楽しい話、おもしろい逸話、忘れられない出来事などがまったくない家族が果たしてあるだろうか。私には改宗してからの何年かで興味深い出来事が何十となくある。

名前だけをとっても楽しいものである。私はサム・ランドという名からコーネリア・ガートルード・バン・ダー・スルイスという名までさまざまな名前に出くわした。

親戚の人たちに質問すると、記憶というもののおぼつかさがわかる。夫のミドルネームを知らない妻、結婚年月日を思い出せない夫、私の父の母などのように兄弟や姉妹の生まれた順序を忘れてしまっている人などがいる。とはいえ、それらを比較調整すれば、あなたは「生きた歴史」になれるのである。もうひとつおもしろいことは、子供の方が両親より日付や場所をよく覚えているということである。

何組かの家族の記録を書き終えたらもう1度ゆっくりと見直しなさい。おもしろい事実を発見できるかもしれない。私が特におもしろいと思うのは曾祖父のアイザック・シェルドンのことである。彼は大勢の子供を育てた人で2年目毎にゆりかごを塗り変えてきたが、12人目の子が生まれて6年が過ぎた。それでゆりかごを捨てようと思ったとたんに13人目の子が生まれることを知った。その子につけた名前がなんと、マーシー（幸運）である。

このような話はちゃんとした家族の記録から拾い出すことができる。あなたの自身の覚えの書の自叙伝に書いたエ

ピソードは、いつまでも忘れることのない大切な宝となるのである。

たしかに、先祖についての話を知るには幾らかの汗と血が要求される。生きている親戚の人たちと会うと、きっと変ったおかしなことを発見できるに違いない。私は祖母の伝記を書く時まで、あの謹厳な祖母が隣家の木になったアズミを失敬したことがあるなどとはとても考え及ばなかった。また私の家族がどのようにして西部に移住したかについても知った。旅行記もないし、手押し車もないし、「おそれず来たれ聖徒」の歌も伝わってはいない。父は1928年に列車に乗って西部へやってきた。あなたは両親や祖父母に、どこで初めて会ったのかを聞いたことがあるだろうか。その答えにびっくりする人もいるだろう。

他に何もできないとしても、あなたには自分という対象がある。あなたの人生の霊的な経験を記録してあるだろうか。人々はそれによって靈感を受けるかもしれない。心をこめてあなたの人生、夢、一番困った事柄、学んだことなどを記録しなさい。つまらないちょっとしたことを書きとめれば、孫が笑ってくれるだろう。毎日書くことを習慣にしながら。必ずしも系図のことではなくてよい。手紙を書く、うまい料理法をうつす、詩や歌を作るなど何でもよい。毎日何かを書くことである。ちりがつもれば何年かして山になるように、毎日のあなたの努力はいつの日か愛する人々と共に昇栄するにふさわしい覚えの書となることだろう。

主に受けいれられる

犠 牲

オウエン・キャノン・ベニオン



先 日若い人が主に対する犠牲について話しているのを聞いた。彼女は犠牲の意味について話したのであるが、物質的な何かを捧げるということだけをとりあげていた。もちろんそれは福音の中で重要なことではあるがその話を聞いているうちに、教会員はイエスが命じられた霊的な犠牲のことを考えることが少ないのではないかと思ったのである。そのことを説明するために、はじめに返る必要がある。

アダムがエデンの園から追われたあと、神はアダムに羊の群れの初子を犠牲として捧げよと命じられた。「多くの日を経て、主の天使一人アダムに現われて言いけるは、汝何故に主に犠牲を捧ぐるやと。アダム彼に言いけるはわれその故を知らず、ただ主の誠命に従うのみ。ここに天使語りて言いけるは、この犠牲を捧ぐることは、御父の生みたもう恩恵と真理に満てるただ独りの御子が犠牲となりたもうことのひながたなり」(モーセ5：6-7)。

こうして、血を流し犠牲を焼くという古代のいけにえの習慣が始まった。アダムから始まって救い主の降臨までイスラエル人の間で行なわれたその習慣は、人間に対する愛の故に神が御子を大いなる犠牲にされることをあらわすものであった。

カインとアベルの話は、受けいれられる捧げものをする事の大切さを教えている。「日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主に供え物とした。アベルもまた、その群れのういごと肥えたものを持ってきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた。しかしカインとその供え物とは顧みられなかったので、カインは大いに憤って顔を伏せた。そこで主はカインに言われた、『なぜあなたは憤るのですかなぜ顔を伏せるのですか。正しい事をしているのですしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのですしたら、罪が門口に待ち伏せています。……』(創世4：3-7)

カインは土を耕す者であったが、主に命じられた物よりも自分の思う物を捧げたいと思った。この話は、神が受けいられる犠牲を捧げることをいかに重要と考えておられるかを教えている。カインは神が特別な犠牲を求めておられることを知らなかった。そして自分の考える物で充分だろうと正当化して考えたのであった。

全イスラエル人にとってアブラハムの話は受けいられる犠牲を真心をもって捧げることの模範となっている。少年イサクが「父よ……火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」（創世22：7）と尋ねた時のアブラハムの苦もんを、子を持つ親ならば想像できることであろう。アブラハムが、当時偶像崇拜を行っていた祭司たちの習慣である人のいけにえを憎んでいたことを考えてみていただきたい。しかし、アブラハムはおだやかな信仰と従順をもって幼な子に言ったのである。「神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」（創世22：8）。

イサクを求められる以外にアブラハムはこの従順を示し得たであろうか。ベンジャミン王は「…幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従しないならば…」（モーサヤ3：19）と語っている。

ここでエライジャの話に移ろう。エライジャが唯一のまことの神への捧げ物を焼き尽す火を天に求めた時、血の犠牲が正しいことを示す神の力が下った（Ⅰ列王18：21—39）。この話の背後

には隠れた意味がある。というのはある意味で、やがてイスラエルに来たるべきことを暗示する出来事だからである。古代イスラエルの歴史をひもといてみると、神のしもべたちが火によるいけにえを捧げることによって神に対する献身を示していたことがわかる。御父の生みたもう独り子が十字架にかかることによって、その血と火によるいけにえは成就されたのである。キリストの死後アメリカ大陸で暗やみの中に生き残ったニーファイ人は、律法の成就を告げるアルパにしてオメガである御方の声を聞いた。彼らは、羊の初子を捧げる古代の習慣をやめるように言われた。神の御子が全人類の犠牲となられたのであった。彼らは「犠牲としてわれに捧ぐべきものは、真にへりくだる心と悔いる精神なり」（Ⅲニーファイ9：20）と命じられた。末の日に主はこの戒めを繰り返しておられる「汝誠に真にへりくだりたる心と悔いる精神とを以て、汝の神に義しき捧物となすべし。……この主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて…」（教義と聖約59：8—12）ニーファイ人や我々に与えられたこの戒めに対して、古代の人々がいけにえに対して感じたと同じような気持ちを持つならば我々は自分が主に受けいられる犠牲を捧げているかどうかを考えてみなくてはならない。我々は、どのようにしたら神の求めておられることにこたえられるかを知ろうともせずにカインのように自分勝手な捧げものをしていることであろう。主の日に祈り

の家へ行き、いと高き者に捧物と聖式とを捧げるとは、どういうことなのであろうか。ブルース・R・マッコンキー長老によれば、「聖式とは神と人との霊的な契約である」。また「最も霊的な意味において、捧物とは主に完全な献身を尽くすこと、へりくだる心と悔いる精神を捧げることである」（モルモンの教義 英文P662, 541—42）。教義と聖約59章の中で、主は、この特別な捧物をいつ、どこで捧げるべきかについて言っておられる。我々の捧物は毎日捧げるべきではあるが、特に主の日には聖餐会に集い、捧物を捧げるようにと命じられているのである。我々は誓約を新たにし（聖式を捧げ）、へりくだる心と悔いる精神（捧物）を捧げるのである。聖餐の祈りに耳を傾けアーメンと言う時に、我々は神と交わした誓約を新たにするのである。敬虔に真心からそうするならば、我々は犠牲を捧げる備えができる。その後の聖餐会の中で、話し手と聞き手が聖霊を授けられるならば、神の偉大さと慈悲深さについて、あるいはキリストにある望みについて、また罪を悔い改めねばならぬことについて教えられるのである。祝福を受けてこれらを知るならば、それは神聖な悲しみとへりくだった心、悔い改めの精神、柔和謙遜な心を生じる。

この感情が真実神聖な悲しみであるなら、我々の捧物は主のみまえにたしかに受けいられる。それは金とか羊の初子とかのこの世の何物とも違っている。

主は子供たちに長い道を用意され、はじめは小羊や小牛のような目に見えるいけにえから、やがて目に見えない心の状態を捧げることで導いて来られたように思われる。これは犠牲に関する違った考え方である。それは内なる人に関わることである。そこには人目に明らかなごまかしの捧物は存在しない。神と識別の賜を与えられた人の他にはこのいけにえを知る人がいないからである。

このような捧物をするのがむずかしいことを考える時、どうしたら受け入れられる捧物ができるかわからない人がいるであろう。什分の一や断食献金その他主に物質を捧げることや、好きな物をがまんすることなどは、いくらかの勇気や自制を必要とする。しかしそれさえ、悔い改めとへりくだる心を捧げ、真心をもって献身することよりは、はるかに容易である。我々はどのようにしてこの戒めを守ることができるであろうか。

答えは主の道に明らかなように簡単である。まず、神についての知識を得るために聖典を読むことが必要である。勉強によって神に近づくことができ、いましめを守ろうという動機や望みがわいてくる。

その説明として、私の少年時代の経験を述べさせていただきたい。私は神の予言者の物語を読み始めた時に、アブラハム、ヨセフ、モーセ、ニーファイなどの偉大さと強さに強く心を打たれた。彼らがどのようにして神と語ることができ、神から愛されたかを読む

ことにより、忘却の幕によって閉じられていた私の心の窓が開き始めたようであった。私の霊は再び神を知るようになったのであった。十代の初めに福音についての疑問が起きた時、私はモルモン経がまことの聖典かどうかを知ろうとして祈った。そして、ニーファイと兄弟たちの話を読んだ時に強く心を動かされたのである。聖霊が驚くべき方法で、私の読んでいた本が神より啓示されたものであることを証した。その日から、神に仕えたいという私の望みは日に日に強まっていったのである。

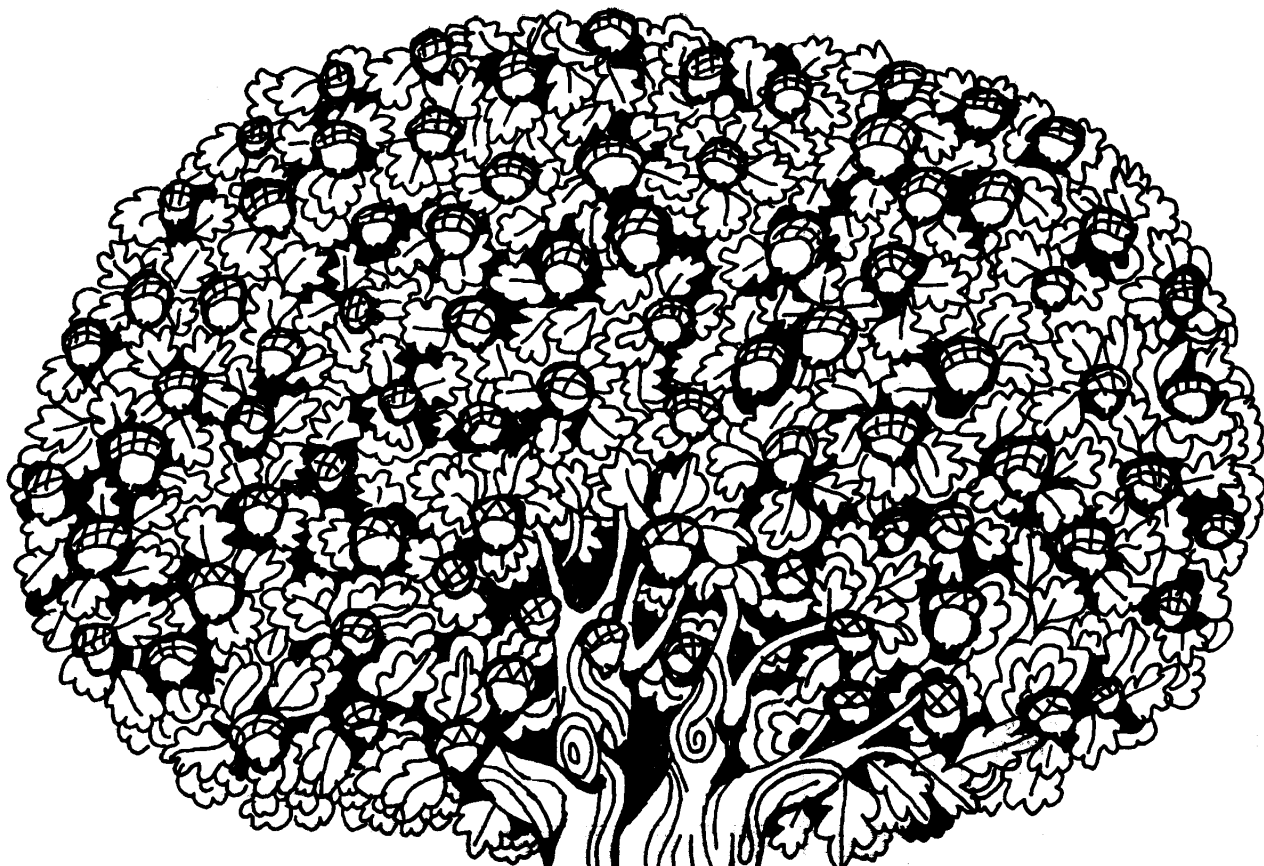
第二に、へりくだる心と悔いる精神を捧げる前に準備をしなくてはならないということである。古代イスラエル人は群れの中の肥えたもの、傷のない小羊を選んだ。清くないものやふさわしくないものを捧げるなどということは考えられないことであった。そのように、我々も傷のない捧物を捧げる必要がある。完全になることはできないかもしれないが、真心から悔悟することはできる。それは真実であって、見せかけやうわべだけのものであってはならない。我々は信仰、悔い改め、バプテスマにより、キリストの恵みを通して罪のゆるしを得るのであるが、これら一連の事柄は全生涯を通じて続く。罪を悔い改め、ゆるされる時に、柔和謙遜な心が生じるのである（モロナイ 8：24—26参照）。この状態にある時、我々は主に捧物をする準備ができる。神の慈悲と愛を知り、心は悲しみと喜び、すなわち罪を悲しみ、主の犠

牲によってもたらされる救いを喜ぶ心によってへりくだるのである。この時我々の精神は傷のない有様で悔いている。

ある人にとって、この経験はひそかな個人的な神との交わりであるかもしれない。またある人にとっては断食証会で話し、聞き手と思いをわかちあいたい経験であるかもしれない。しかしいずれにせよ、それはエライジャの話と似ている。その時は捧物が正しいことを示す火が天から下った。イエスはニーファイ人にこう約束されたのである。「およそ真にへりくだる心と悔いる精神とを抱きてわれに来る者は、われこの者にみな火と聖霊とを以てバプテスマを施さん」（Ⅲニーファイ 9：20）

主の日ごとに命じられたように祈りの家に集い、このいけにえを捧げるならば、我々はいかなる力を与えられることであろうか。

イスラエルの歴史の中に、我々の生活に必要なことの原型を見ることができると言えないであろうか。イスラエルの民はキリストまで導いてくれる律法を持っていた。物質的ないけにえに始まり、やがて終りには霊的ないけにえを捧げるようになるのである。我々は物質的な捧物をしなくてはならないが、序々にへりくだる心と悔いる精神という霊的なより大いなるいけにえを捧げる状態にまで高められないならばこの人生の真の目的のひとつを見失ってしまうのである。



ドングリと カボチャ

フローラ・ルイス



9月のあるはれた日、ギャレットじいさんはいなか道をさんぽしていました。あたりいちめんに、よくみのった大きなカボチャがほそいつるにたくさんなっていました。それを見てギャレットじいさんは思いました。神さまはどうしてこんなまちがいをなされたのだろう。わしなら、大きなカボチャは大きなかしの木に、またわしの小ゆびぐらいしかなドングリはほそいカボチャのつるになるようにしたじゃろう。大きな木には大きな実、小さな木には小さな実になるようにすべきじゃ。わしに、そうだんしてくだされたらよかったに……などと考えながら、ギャレットじいさんは、かしの木の下にながながとねそべってそのままねむってしまいました。しばらくするとなにかがおちてきました。それでおじいさんは目をさましてしまいました。かおに手をやるとドングリがひげの上におちていました。それに、はなからは血がでているではありませんか。これでギャレットじいさんのきもちがかわりました。「ああ、この小さなどングりがわしのはなにあたったので、はな血がでてきたのじゃな。もし、あの大きなカボチャがあたまの上におちてきたらいったいどうなっていたことじゃろう。」ギャレットじいさんはいまやすっかり目をさました。そして「神さまはまったくうまいぐあいに、なんでもおつくりになったものじゃわい。」と神さまをほめたたえました。

「笑わせっこ」あそび

バーナデイン・ビューティ

ジーン・ルイスはアパートの戸を、おこってびしゃりと
しめて出て行きました。そのあとすぐに戸がサツと
開いてシャバスおばさんがあらわれました。おばあさんは手
にしたついで床をたたきながら、「ジーン・ルイス、もどっ
てきなさい。今すぐもどってきて、ちゃんと戸をしめなおし
なさい。」ときびしい声でいいました。ジーンは、きこえな
いふりをして、わき目もふらずにろうかを通りぬけ、外へ出
て行きました。ジーンは、じぶんがわるいことをしているこ
とを知っていましたが、気にとめませんでした。シャバスお
ばさんは、ジーンのおとうさん、おかあさんが、海岸に住ん
でいるお友だちのところへ行っているあいだのおるすばんと
して、ジーンの家に来てくれていました。ジーンは、年より
でいじわるなシャバスおばさんよりも、お父さんおかあさん
がだれかもっとやさしい人をさがしてくれたらよかったのに
と思いました。

「30分しかない」とジーンはつぶやきました。いったいど
うやって、たった30分でおばあさんのところへ行って帰って
こられるのだろうか。シャバスおばさんはほんとうにいじわ
るだ！ジーンが道ばたの小石をけると、まちかどにある
花屋の方へころがっていき、小石は店のまえでとまりました。
ジーンはお店にたちより、きれいなピンクのバラをおば
あさんのために買いました。ジーンが目かがやきました。
おばあさんはとめてくださるかもしれない。そうだ、ぼくが
シャバスおばさんのことをどう思っているか、おばあさんは
わかってくださるにちがいない。そうしたら電話もかけてく
ださるだろう。ジーンはにっこり笑いました。もう帰らなく
てもいいんだ。そしてアパートの戸をらんぼうに閉めたから
といっておこられなくともすむし……。

でも、こんだけだけはちがっていました。おばあさんは、ば
らの花をあげるとだいへんよろこんでジーンをだきしめてく
れましたが、ジーンがシャバスおばさんではなく、おばあ
さんのところにとりたいたいという、おばあさんは大きく頭
をふりました。

「ジーン、わたしは毎朝お店にいないといけないのよ。
だからあなたのそばにはいてあげられないの。」

「ぼくは、じぶんのことぐらい、じぶんでできます。でも
おばあさんはぼくがいないほうがいいと思っているんでしょ
う。」とジーンはおこりっぽくいいました。

「まあ、この子はなんということをするのでしょうか。そん
なふうには思っていないことぐらいわかっているでしょう。ジ
ャバスおばさんは、なん度もジーンのお友だちのところでおる
すばんをして、そのおとうさん、おかあさんたちからとても
ほめられているのですよ。」とおばあさんは、とやかにジーン
を引きよせ座らせながら言いました。

「ぼくは、あのおばさんなんて大きいです！ぼくの友だ
ちで、あのおばさんを好きな子はだれもいないんですよ」と
ふくれ顔をしていた。

「どうしてなの。」とおばあさんがたずねました。

「だって、おばさんはいつもふきげんでにくらしいんだも
の。おばあさんだったら本を読んでくれたり、遊んでくれた
りするけど、おばさんはなにもしてくれないし、笑ってもく
れないの。」

「お気のどくなシャバスさん、あの方は若いころとても美
しくてあかるい人でした。」「きれいだったの？」とジーン
はふしぎがりました。

「そうですよ。国中でも一番美しい人のひとりでしたよ」
とおばあさんがにこやかにいいました。

「あの方の目はバイオレットの花の色をしていたので、わ
たしはよくやきもちをやいたものでしたよ。」このあかるい
ほがらかなおばあさんがあのおシャバスおばさんに、やきもち
をやいたことがあるなんてしんじられませんでした。

「でもシャバスおばさんはうんと年よりに見えて、いつも
おかしなかつこうをしているけど、おばあさんは年をとって
みえないし、それに、きれいですよ。」

「それはね、わたしにはジーンやジーンのお父さんやお母
さんがいてくれるからなの。でも、シャバスおばさんにはだ

れもないのですよ。あの方はいつもだれかしのめんどうを見てあげていたのよ。はじめは足のふじゆうな妹のせわをまたそのあとには、年をとった両親のせわをしていたのよ。それにお金がいつもじゅう分になかったのでくろうしたのですよ。」

「どうしてみんなで助けてあげなかったの？」とジーンはききました。

「助けようとしたのよ。でも、そのころは大ていの人々がまずしかったの。」とおばあさんはためいきまじりにいました。

「それに、あんまり心から助けてあげようとしなかったのね。じぶんのことにおわれて、他の人が困っていることは忘れやすいものなのです。」あの方は年もとったしとてもさびしいのですよ。これからさきは、子供のめんどうをみてあげ

るほかに、なんのたのしみもないのよ。」ジーンは、とつぜんのどにこみあげてくるあついものをのみこみました。

「おばあさん、ぼくは、シャバスおばさんにわるいことをしてしまいました。」とジーンは小さな声でいいました。

おばあさんはジーンのかたに手をおいて、

「いいことがあります。シャバスおばさんとおもしろいゲームをするのですよ。」といいました。ジーンはかたをすくめてきっぱりといいました。「おばあさんは、ゲームはきらいだからしませんよ。」「さあ、どうかしら。これは『笑わせっこ』といって、かつためには、まず、シャバスおばさんを笑わせなければいけないのよ。」ジーンは、『笑わせっこ』なんて、あんまりおもしろいと思いませんでしたが、おばあさんがじぶんの考えにとってもまんぞくしているようなので、ジーンは同意しまし





た。「じゃ、いいわね、人を笑わせるにはジーンも笑わないといけませんよ。そのことをよくおぼえていらっしゃるね。もし、ゲームにかかったらい週の土曜日の午後、公園の人形しばいにつれて行ってあげましょう。」

「人を笑わせるなんて、思つたほどやさしいことじゃないんだけどなあ。」とジーンがいうと、

「なんとかやれますよ。ジーン。」と おばあさんはいいま

した。けれどジーンは、家に近づくにつれて、シャバスおばさんを笑わせることができるかどうか、じしんがなくなっていました。おばさんはじょうだんがきらいだし、なぜなあそびなんて何になると思っているのですから。ジーンはまちかどの花屋でどうしようかとしばらくのあいだまよっていました。ぼくのおばあさんにお花をもっていくといつもよろこんで笑ってくれるんだけどなあ—と思っているうちに、おばあさんが、シャバスおばさんの美しい目のことをいったのを思い出しました。それでジーンは東のバイオレットを買いました。家を出てから30分いじょうたっていました。おばさんはきつとおこっているにちがいないと思うと、家へ近づくにつれて、ジーンの足どりはおもくなっていきました。「あら、ジーンだったの。もう帰ってくるころだと思っていましたよ。」 シャバスおばさんは家に入ってきたジーンをみていました。

「おばさん、ぼくおそくなってごめんなさい。」 ジーンはにっこりほほえみながら、おばさんに花をわたしました。

シャバスおばさんは、あっけにとられていました。

「わたしに？」

「うん。そのドレスによくあうと思ったから。」 ジーンはおばさんに笑ってほしいと思いながら、顔を見ました。おばさんは笑いませんでしたが、花をドレスのむねのところにつけました。ジーンは、ちょっとためらいながら「おばさんの目はバイオレットの色をしているのね。」といいました。するとおばさんの目がまず笑いはじめました。そして口びるがほころび、やがてほほえみは顔じゅうにひろがり、おばさんの顔はわかわかしくかがやきました。「おばさんが笑った」ジーンはうれしそうにさげびました。

「おばさんはきれいだね、！」シャバスおばさんはとおくの方を見るようなようすで、いいました。「ね、ジーンそんなことをいってもらったのは、ずい分久しぶりのことだわ。」

「おばさん、これからはなんどもきかれますよ、！ ぼくがおばさんにゲームをおしえてあげるのだから、！」とジーンは笑っていました。

「わたしはゲームなんて、とてもできませんよ。」 とシャバスおばさんはじしんなさそうにいいました。

「おばさんでもできますよ。だれにだってできる『笑わせっこ』あそびっていうゲームなんです。」 といってジーンはにっこり笑って見せました。ジーンは、シャバスおばさんが笑いかえしたのを見ても、すこしもおどろきませんでした。

人生のチャレンジ

管理監督 ジョン・H・バンデンバーク

初 めより、人は反対の世界に住んでいる。アダムとイヴがエデンの園を追い出された時、主は次の言葉によってその状態を命じられた。「地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、……あなたは顔に汗してパンを食べ……」（創世記3：17）

「地はあなたのためにのろわれ」とは興味深い言葉である。これは、人生における反対の必要性をよく考えてみないと不合理なことのようと思われる。一面で人はこの反対によって向上することができる。この向上からは退歩の面も生じるのである。反対の法則がなければ、万物はいつまでも、どこまでいっても変化がない。

モルモン経の中でリーハイは、人生において人が進歩あるいは成長をとげるために反対が必要なことを、次のように簡潔に説明している。「それは、すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。もしも物事にその反対のものがなければ、正義も不正も聖潔も憐むべき様も善も悪も生ずることができぬ。それであるから、すべての物事はみな合して一つとならなければならない。故に仮に万物がことごとく一体となるならば、それは生死なく滅不滅なく幸不幸なく知覚の有無もないままで一切の差別を失ってあたかも死のような有様で存続しなければならない。こう言うわけで、万物は無用に造られたと言わなければ

ならないし、またそれ故に創造の結果は目的のないものであったろう。」（Ⅱニーファイ2：11-12）

この聖句から人生における反対の真の意味を理解している教会の若人は、即座に完全な世界を造ろうとして革命や暴力をそそのかす偽りの声にまどわされる必要はない。永遠の生命へ向かう途中の霊的あるいは道徳的な訓練として、私たちは争いや不正、失敗に遭遇する。そしてすべての人は、完全、永遠の平安あるいは喜びを目指して向上すれば、不完全、永劫の悲しみあるいは怒りへと退歩もする。自分の行動を決める機会すなわち自由意志には乱暴者や罪深い者、そして肉欲的な人間にも本能を表わすことが許されるという条件がつきものである。これらの人々が自分の行動を選択する場合、罪なき人々を傷つける種をまき、平安を乱して貧困を生じさせる。さらに、主に忠実であろうとする人々が、永遠にわたって到達する完全を得るために努力し進歩向上しようとするのさえも妨げるのである。

教会員は、解決しなければならない問題があることを承知している。しかも、それらの問題を切り抜ける効果的な方法は、法律や権威筋の秩序正しいやり方に従うことであると知っているのである。教会の教えを受け入れている者で、法律や秩序に従わずして現代の問題に立ち向かうという者はだれ一人としていない。なぜなら、「われらは、王、大統領、統治者、長官に従

うべきを信じ、また法律を守り、敬い支うべきを信ず」るからである。（信仰簡条第12条）

信仰深い末日聖徒は、法律的にまた合法的に認められた方法を通してのみすべての人がそれぞれの努力によって永遠の平安と喜びの道を選ぶ機会のあるよりよい社会を築くという現代のチャレンジを果たそうとする。

少数の無暴で口さがない人々は、社会の悪をすべていわゆる現体制の責任だとしている。彼らは、明らかに完全でないものを打ちこわそうとしている。しかし、その完全でないものは進歩の土台にすぎないのである。彼らには、憂えていることがらの1つでも改善する計画、ましてや能力はないのである。社会の不完全をよりよいものと置き変えるのに計画や能力、手段を持たない者は、進歩向上どころかかえって退歩していると言えよう。末日聖徒の若人は、現代のチャレンジと問題を認識している。この人生が旅であることを知っている。平安と豊かな望みのある目的地は、この地上だけでは完全に見い出されない。永遠の喜びに到る道は急で険しい。しかし道には人の心をわき立たせるものが満ち、すべての正しいことをなし遂げさせてくれる。若人は喜んでこの道を登ろうとする。チャレンジと反対の道は、彼らにとって不満の対象ではなく可能性なのである。

愛の冒険

とうとう起こってしまった。彼女がずっとあり得ないと考えてきたこと、自分には絶対起こりたくないと言ってきたこと、自分よりも弱い人だけに起こると思ってきたことが彼女にも起こった。彼女は非教会員と恋をしてしまったのだった。

事実、彼女は自信たっぷりであった。教会でひとりぼっちでいる姉妹、あるいは子供を連れていながらもさみしそうにしている姉妹を、あわれみの心でながめていたのである。そういう姉妹たちはたいてい2つのグループに分かれていた。自分は教会員になったが夫が教会に改宗していない人々、そしてまた教会員として育ちながら一時神殿結婚の標準を捨てた人々である。どちらが悲劇であろうか。どちらが神権の助けを多く必要とするだろうか。

「私は違うわ。」ジャニーは軽べつするように言っていた。そして今、彼女は「今の私はどうかしら。」と自問する。事態は重大なところにさしかかっていて、自分だけでなく子孫にも関係してくるのである。

家を出て職業学校に行き、町で勤めを始めてから、3年の月日が流れていた。2人のモルモンの宣教師が彼女の家を訪れたのは2年半前だった。2年半前、暑い日差しをさけて彼らを家に招き入れたが、心に何かを強く感じてもう一度来てくれるように言ったのだった。

それ以来教会は彼女の生活そのものとなっていた。大都会でひとりぼっちだった彼女には、にわかに暖かい友人ができてきた。それまで時間があつた彼女も、善良だが怠惰なモルモン教徒にあるような暇はなくなった。何か欠けているような不安定な状態から、わき出るように質問が飛び出しても満足のいく答えが得られるという新しい世界を見出したのだった。だれからもかまわれることのなかった彼女だが神から愛されている子供として新しい自信が芽生えてきた。

彼女の新しい人生は、豊かでいつも新しい経験に満ちていた。しかし、姉妹たちはいつも首を横に振りながら彼女に言うのだった。「ジャニー、だれ





—フィクション—

キャサリン・ケイ・エドワーズ

かいい末日聖徒の男性がいるといいのにね。」そしてジャニーも、心の中でそう思っていた。結婚、それは常に彼女の夢の1つであったし、段々とそれに対する希望は強くなっていた。

ある時、いつになく、「ああ、人生がむなしく過ぎ去って行く」という感傷的な気持ちになっていた彼女は、親友が通っている教会のダンスパーティーに誘われて行った。その親友ルス・アンモジャニーと同じように、教会で唯一の独身女性であり、2人の間にはかたい友情で結ばれていた。

その晩の彼女はお気に入りのうすいピンクの洋服を着ていても、だれかにめぐり会うような気はあまりしていなかった。その晩のダンスもいつもの教会のダンスと変わりばえがしないとあきらめかけていた。中年の男性はお義理から、また10代の青年は同じ年頃の女性を誘う勇気がなかったので彼女と踊っていたのである。だからだれかにそっと肩をたたかれ、次の曲をと誘われた時、彼女の胸はときめきを感じたに違いない。ふりむいたとたん、彼女

の目にエド・ウィルキンソンの涼しげな青い瞳が入ってきた。

初めて見た瞬間、それは愛ではなかった。しかし、彼は自分がいつも知りたいと思っていた男性だというのが第一印象であった。エドの方はどうなのだろうか。彼のジャニーに対する第一印象は、ただ彼女に会ってもっとよく知りたいというものであった。

その晩は光と音楽と笑いが入り混じり、夜床に入っても彼女はほんのささいなことまでもおぼえていた。ほほえみは消えず、まだ少し震えているようだった。そして次の金曜日の晩に約束したデイトのことを楽しく思い起こしていた。

そしてデイトはうまくいった。

忠実なモルモン教徒として神殿結婚を強く希望していたジャニー・マッコームが、モルモンでない男性からのデイトの申し込みを受けたのである。その男性は他の教会で活発であった。事実、彼女は時々末日聖徒以外の男性とデイトをしていた。しかし、同年代の若い男性が少ないオクラホマでは、こ

それはそう顔をしかめるほどのことでもなかった。でも今度の場合は違っていた。非常に違っていたのである。

そんなに悪いことではないはずだと彼女は考えていた。彼はすばらしい男性だし、お酒もたばこも飲まない。それに物静かで、下品なところがなかった。ユーモアを心得ていて、時間の使い方も上手だった。礼儀といい、思いやりといい申し分なく、少し恥ずかしがりやながら人とは立派につき合っていた。簡単に言えば、彼は1つのことを除いて完全なモルモン教徒であった。その1つのこととはモルモン教会の会員でないということである。

一晩中、ああでもないこうでもないと考え、2人の楽しい思い出で心を慰めては、彼のよい点を数えあげていった。しかし、いつも行き着くところは彼が自分と同じ信仰ではないということであった。そして、自分は彼とデートをするだけのことなのだからという結論に達して眠りについていった。あまり真剣に考えなくなかった。ただクリスチャンとしての清い喜びを分かち合相手が見つかったということを感じたかった。究極的には立派な神権者以外に結婚は考えられなかったし、彼女は自分の感情をよくコントロールしていた。そんな時、エドも同様に「彼女はすばらしい女性だけど、モルモン教徒だからね。いやそんなに真剣に考えることはないんだ。ただのデートじゃないか」と自分自身に言い聞かせているのではないかという考えが、彼女の心をすーとよぎった。

エドとの仲が深まっていった数週間のことを、彼女はどう表現してよいかわからなかった。2人の好き嫌いは似ていた。同じ問題に悩み、同じような夢と目標を抱いていた。いろいろなことを一緒にしてみても、どれもみな2人にとって喜びであった。2人の間には不安も恐れもなく、まるで切り抜きのはめ絵を合わせたようにピッタリであったが、1つだけ欠けていた。

たった1つが欠けても、それが重要な部分すなわち完全な美を示す鍵であれば、はめ絵の効果はどうであろうか。ジャニーはそのことをよく承知していた。エドもよく知っていた。

ジャニーにとってこの問題は同時に他の問題のキッカケともなった。教会の活動を夢中になってする時があるかと思うと、いやいやながら集会に出席することがあった。教会で会うすべての人に愛を感じるかと思うと、だれからあいさつされてもそっけない態度をとることがあった。もう彼に会うまいと心に決めても、翌日はもう彼なしでは生きていけないと嘆くのがあった。他の人とデートをしようと思っても、考えた時から退屈になって心はエドのことばかりであった。

2人の深い愛は、時として耐えがたいほどにまでなった。

ある日曜日、聖餐会から急いで帰る彼女をつかまえて、プラット監督が少しの間監督室に来るように言った。彼女は監督を尊敬していたのですぐにそれに応じた。そして彼女は、もはや自分が神権の導きなしにはやっていけないことをよく知っていた。しかし、彼女は、かならずやって来ると思っていたこの時を長いこと恐れていたのだった。

「ジャニー、このために時間をさいてくれてありがとう。」監督はちょっとあいさつをしてから話を始めた。

「最近、あなたと話したいと思っているんですよ。でも集会の後ではなかなかあなたをつかまえられなくてね。何か困ったことでもあるんじゃないですか。」

ジャニーは緊張して腰をかけ、神経質にふるえている指をながめ続けていた。それでも彼女はやっと一言、「はい」と言った。

「ジャニー、私に話してくだませんか。お助けしたいんですよ。あなたも私の助けが必要じゃないですか。」

彼女はゆっくりと、背の高い金髪の

青年の話を始めた。彼は、自分が人生から得たいと思っているものをすべて示してくれた人であり、自分にはないものを教えてくれた人であった。監督は彼女の話にじっと耳を傾け、時々うなずいたり質問をしたりしていた。

「よくわかりました。問題ですね。でもその青年はすばらしい方のようにですね。」

「そうなんです。監督さん。彼はとてもすばらしい人なんです。もし彼がうるさくて、うんざりするような人であれば、私もつきあいをやめたと思います。でも彼は違うんです。知れば知るほど、彼は尊敬できる人なのです。彼はとてもモルモンの人なんです。でも彼はそれに気がついてないんです」

監督はほほえみながら彼女に言った「あなたは、監督や、宣教師や、あるいはただモルモンであるというだけでぶつかる最も悲しい問題にあっているだけです。私はすばらしいモルモンになれただろう人たちをたくさん見てきました。話し合った末にバプテスマを受けるところまでいきながら、ある理由でモルモンにならなかった人たちもいました。私たちの祝福を分けてあげることが彼らにとってどんなに意味深いことであり、どんなにすばらしい成長をもたらすことでしょうか。教会には彼らが必要です。しかしそれよりも、彼らにとって教会が必要なのです。」

「ええ、そうですわ。」ジャニーは身を乗り出して言った。「時々私たちは、彼らの頭の上をかすめただけで、『この教会のことがわかりませんか。あなたにとって一番すばらしいことなんですよ。』と叫んでいるんですね。」

彼女が急にしゃべり出したので、監督は笑いながら眺めていた。ジャニーも監督につられて笑った。そして彼女は、何週間かぶりに心が和らいだことにふと気がついて、うれしくなった。

監督はまじめになって言った。「ジャニー、その青年とのつき合いをやめなさいとは言わないが、少々きついこ

とをあなたに言いますよ。あなた流のやり方で、好きな時に、彼に福音のすばらしさについて話して聞かせて欲しいのです。あなたは強い信仰の持ち主となって、いつも福音の生きた模範にならなければいけません。彼を愛し、彼に教えて下さい。でも彼が教会に対して心のかたくなにするのであれば彼と別れ、新しい人生を歩む力を聖霊によって得なければなりません。」

ジャニーは責任の重さにまごついていました。今まで教会でいろいろな召しを受けてきたが、これほど恐れ多く感じ自分にとって意味深いものはなかった。

「私はあなたにお願いしましたけれど、あなたは決して1人ではありませんよ。私もお祈りしていますし、ご希望であれば副監督たちもお祈りします。しかし、最も大きな助けは聖霊から得なければなりません。断食と祈りによって大いなる力を得て下さい。毎日、いつでも、自分自身にこう問うて下さい。『神殿結婚は私にとってどんな意味があるのか。神権はどんな意味があるのか。』あなたは神権者のいない家庭で生活してきました。これからずっとその状態のままでいたいですか。あなたの人生において、福音はいったいどんな意味を持っていますか」

ジャニー・マッコームは監督の祝福とけんそんな祈りをしっかりと心に留めた。今までこんなに謙遜になり、こんなに行く末について真剣に考えたことはなかった。

続く数週間の経験は言い表わしようのないものであった。心からなる喜びと激しい苦悩の日々であった。彼女は少しずつエドに教会の原則を話していた。そしてモルモンについて説明していった。多くの時間を自分の勉強に費し、自分に問うてみた。自分にとって教会は何んであろうか。問題が大きくなるたびに彼女は監督のところへ行き、いつも慰めとなる適切な助言を受けてきた。少数のワード部の会員にも

自分の問題を打ち明け、彼らの祈りと励ましの言葉に感激した。彼女をとりまくすべての人が立派な人であれば確かに福音の中に真理を見出すものだと言って彼女を励ました。

そしていくつかの方法があった。

彼が初めて彼女と共に教会に来た時会員の中に彼が知っていたり、尊敬している人々がたくさんいた。彼はすべての人から暖かい手をさしのべられ、末日聖徒としての喜びに満ちた人々の表情に強い感銘を受けた。

エドの家では、息子が家の宗教に疑問を持つことに最初不信の念を抱いていたがジャニーの暖かい心とエドのまじめな探求心とが家族の心を少しずつ和らげていった。彼はいつもよい息子であったし、家族もこの問題に関して息子を信ずるより他なかったのである。

その他、MIAのパーティー、長老とのテニス試合、プラット監督一家との夕食会、ステーキ部大会、日曜学校の求道者クラスなどがあった。エドがモルモンとその生き方について知っていくすばらしい段階であった。ジャニーにとっても、自分がいかにエドと結び固められたいか認識する時であった。

数週間後、ジャニーは本を読もうと思って部屋に1人で腰をかけていた。しかし心はエドのことでいっぱいであった。疲れた心でそっと目を閉じた。最近あまりうまくいっていなかったからである。彼の心にはいつも疑いがあった。しかも最近の話し合いでは、彼には重大なことで受け入れられないことがあった。事態はまずい方向へ行っていた。ある意味で危機が迫まり、彼の何かが強く抵抗しているように見えた。

彼女は、すべてのことが水の泡になってしまったのだろうかと考えた。彼女のこれまでの祈りと努力はもう終わってしまうのだろうか。彼が教会を受け入れなかったらどうなるのであろう

か。彼女はそれでも彼を愛し、結婚していつの日か心を変えてくれるだろうという望みを持続けるであらうか。彼は彼女と教会にあいそをつかして、永遠に彼女を捨てるのだろうか。もしそうであれば、彼女はもうやって人生を建て直していくのだろうか。このことで、彼女は教会に対して恨みを抱くのだろうか。それとも、彼はすばらしい真理と神権とを受け入れて、彼女と2人で永遠の愛ある家庭を築いて行くだらうか。

その時急に荒々しくドアをたたく音が聞こえ、エドが彼女を呼んでいた。彼女は急いでドアを開けた。

「ジャニー、邪魔してごめんね。でも心に感ずるところがあって、どうしても君に話したくてね。ねえ、いいかい。」

彼女は黙って彼の方へ歩いて行き、ドアを閉めた。2人はしばらくの間言葉もなく、どんどん歩いて行った。深く沈痛な思いが彼女の心をよぎった。彼女は彼の腕にもたれたいと思ったが恐ろしくてできなかった。

やがて彼は、2人がお気に入りの公園の老木の前で立ち止まった。彼女は低い枝に腰をかけた。めずらしく月夜で、あたりはしーんとしていた。

「ジャニー、ぼくは今夜とても変わったことをしたんだよ。」

彼女は何を言ってよいかわからず、ただかすかに「まあ」としか言えなかった。心の中で、彼を助けるよう私に力を貸して下さいと叫んでいた。

「今晚ぼくはお祈りをしたんだよ。いや笑わないでくれ。実にまじめなんだから。ねえ、前にもお祈りはしていたと思っていたんだけど、でも今度のだけは違うんだよ。今までにない経験だったよ。平安だよ、ジャニー。今まで思ってもみなかったすばらしい、本当の完全な平安なんだ。長老たちは心から祈りなさいと言っていたけれど、ぼくは本当はしていなかったんだね。だからぼくの心は疑いと恐れに悩んで

いたんだ。でも今晚は、今までになく真剣にひざまづいて祈ったんだよ。」

彼女は身動き1つせずにこの新しい大いなる信仰を胸に感じながらじっと腰をかけていた。それから、彼がこれを自分に話してくれたことに驚いた。

「それから疑いはすべて取り去られぼくにはすべてがはっきりとわかり、すばらしく見えるんだよ。教会を疑う原因が、全部なくなってしまったのだね。あまり重要なことではなくて、ぼくが君のために教会に入ったのだと思われやしないかということもあったんだ。ぼくは、ジョセフ・スミスが予言者であり、末日聖徒イエス・キリスト教会は地上におけるキリスト御自身の真の教会であることがわかったんだ。ジャーニー、ぼくは心から良いモルモンになりたいと思ってるんだ。中途半端ではなく、生涯を教会に捧げて良い教会員になり、同胞に対しては良い兄弟、君にとっては良い夫になりたいと思っているんだ。ぼくは、永遠に君と進歩したいと思っている。ジャーニー、ぼくには君が必要だ。愛しているよ。」

彼女はじっとすわっていた。知らないうちに涙があふれ、頬に伝わっていた。

彼女の心から次の言葉が聞こえてきた。「愛する天のお父様、この瞬間と彼の美しい霊とを忘れさせないで下さい。私の疑いの心と不平とをお許し下さい。私を彼にふさわしい者となして下さい。私は自分の弱点がわがままであるとわかりました。どうぞお許し下さい。彼を知ってから、私は彼を、自分を神殿に連れて行ってくれるモルモンに改宗しようとそればかりを考えてきました。人のことよりも、自分の必要ばかりを考えてきた私をお許し下さい。」

彼女は美しい人の顔を見つめ、指先きでそっとなでた。彼女の顔は喜びで輝いていた。愛の冒険、そして彼女の心は真理の確かさを思っていた。

教会の大管長

H・パーカー・ブラウト

1844年6月27日の夕方、予言者ジョセフ、スミスと兄のハイラム・スミスは、イリノイ州カーセージで殉教した。「こうして、わずか14年の公務を経て、予言者の職は終りを告げ、新しい教会は歴史上最大の危機にさしかかった。予言者の警告にもかかわらず、人々は自分にふりそそがれた恐ろしい悲劇の備えを怠っていた。」¹

予言者の死を知らされると、福音を宣べ伝えたり、また合衆国大統領として無所属で立候補したジョセフ・スミスの政治所信を表明するべく特別の召しを受けて東部にいた十二使徒評議会の中のある人たちは、ノーヴーに向かって旅を始めた。カーセージでジョセフと共にいたウィラード・リチャーズとジョン・ティラーを除いて、すべての十二使徒たちは8月6日ノーヴーに到着した。²

予言者ジョセフ・スミスの死で教会の第一副管長であったシドニー・リグドンも戻ってきた。

主の御心に反し、ペンシルバニア州ピッツバーグ³にいたリグドンは、1844年8月3日の土曜日にノーヴーに着いた。翌日彼は、ウィラード・リチャーズ、パーレイ・P・プラット、ジョージ・A・スミスと共に評議会に出席するよう言われた。⁴

この会で、シドニー・リグドンは教会の指導者の地位を公式に要求した。「リグドン長老は、『わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は

あなたがたの道とは異なっていると、主は言われる。』(イザヤ55:8)という聖句から説教をした。彼は、主が自分に教会の立場について示されたと言主張する示現について述べ、ジョセフが教会を始めた時のように、ジョセフに従って教会を盛りたててべく任命された後見人が必要であると言った。

彼は、自分がまさしく古代の予言者によって歌われ、記され、喜ばれた者であり、すべての時代に予言者たちの中にあつて主たる働きをなす者であると言った。⁵

8月4日、集会の午後の部で、ノーヴー・ステーク部長のウィリアム・マークス長老はシドニー・リグドンの要求に対し、「(大管長)後見人を選ぶ目的で」数日以内に特別集会を開くよう通知した。⁶

8月7日水曜日、午後4時、使徒ならびに高等評議員、大祭司たちの集会が開かれた。ブリガム・ヤングはシドニー・リグドンに、彼が受けたという示現と啓示に関し、教会に対する見解を述べるように要求した。

リグドンは自分の立場を次のように述べた。

「私の使命の目的は、聖徒らを訪れ後見人として自らを彼らに捧げることである。私は、6月27日にピッツバーグで示現を受けた。これははっきりとした示現ではなく、私の心に示されたものである。しかし、示現は続いて、『教義と聖約の書』についてふれた。

この教会はジョセフ・スミスのもとにたてられねばならず、すべての祝福は彼から得るべきものであると、私に示された。私はジョセフの代弁者として聖任されたため、ノーヴーにやって来て教会が正しい方法で治められているかどうか見届ける必要がある。ジョセフは、自分がいつもしたと同じように、この教会と私の関係を支持している。だれもジョセフの後を継ぐことはできない。

王国は、ジョセフを通してイエス・キリストのもとにたてられるべきものである。啓示は今もなおなければならない。殉教した予言者は依然として教会の頭であり、すべての定員会は、聖餐を受ける時のような心がまえでいなければならない。私はジョセフの代弁者として聖別され、彼に代わって語るよう命を受けた。私たちの頭はなくなろうとも、教会の組織はなくなるならない。

このことに関し、私たちには種々の感情があるかもしれない。私はジョセフの代弁者として召されて、彼に従った教会をたてたいと思っている。もし人々が私をこの職に支持したいと思うのであれば、すべての人が自分で承認するという原則にのっとりたい。

私は人々の後見人であることを提案したい。このように、私は自分の責任を遂行し、主が私に命じたもうことを行ってきた。人々が私を受け入れようが受け入れまいが、それは人々の自由である。」⁷

シドニー・リグドンに続いて、ブリガム・ヤングが教会の指導者について述べた。次はその一節である。

「私は、だれが教会を導こうと構わ

ない。たとえそれがアン・リーであろうとも。しかし、一つ知っておかなければならない。それは主の言われたことである。私は、この件に関して主の御心を知る鍵と方法とを持っている。

私は、私たちの中にジョセフとハイラムの生命を狙ったように、十二使徒の生命をも狙おうとしている者がいることを知っている。たとえ私たちが殺されようとも完全な神権が存続するよう、私たちは人を聖任して完全な神権を与えるであろう。

ジョセフは私たちの頭に、使徒職につけるすべての鍵と権能とを与えた。自身も殺されるまで持っていたものである。そしてだれも、あるいはどんな集団も、この世と次の世においてジョセフと十二使徒会の間に割り込むことはできない。

折りにふれ、ジョセフは十二使徒会に言っていた。『私は基礎を置いた。あなたがたはその上にたてなければならない。あなたがたの双肩に王国がかかっているからである。』⁸

ブリガム・ヤングは、翌日8月8日10時に特別大会を開くことを要求して話を閉じた。出席する人は、「各定員会に関係する人々」であった。⁹

この特別大会で、シドニー・リグドンは1時間半をかけて、教会の後見人を選ぶというテーマで話した。そして彼が選ばれるべき「後見人」ということであった。

ブリガム・ヤングは聖徒たちに向かい、もし主の御心と御旨を知りたければ、秩序をもって共に集い、またいくつかの定員会による一般集会、決定事項に何らの訴えるところもない法廷を開くはずであると語って、午前の部を

終えた。彼は、会員による一般集会と同時に、その午後2時に定員会の集会を要求した。¹⁰

午後の部で、ブリガム・ヤングは立って話をしながら人々の前に変貌を見せた。人々は彼を、姿形から声まで予言者ジョセフ・スミスだと思った。

彼は、大管長会が空席の場合は十二使徒定員会が教会を指導することを主張した。

「十二使徒と人々にかかわって私が受けている第1の席次は、いくつかの質問をするところにある。私は末日聖徒に尋ねたい。あなたたちはこの時にあたって、後見人と予言者のどちらを選びたいか。私たちの予言者と祝福師を取られたからには、この世から神の王国にいたるまであなたがたを守り、導き指導する人が欲しくはないか。後見人あるいは予言者、代弁者あるいはその他になるべき人を必要とする者はすべて、右の手を挙げてその意を表わすように。(挙手なし)

もし人がリグドン副管長を指導者に欲するのであれば、彼でもよいだろう。しかし、あなたがたに申しあげたい。十二使徒定員会は世界中にあって神の王国の鍵を握っているのである。

十二使徒会は神の御手により任命されている。そして神権の鍵、すなわち世のすべてに行きわたる神の王国の鍵を有する独立した組織である。これは真実である。神よ助けたまえ。十二使徒会はジョセフの次に居り、教会の大管長会に匹敵する。

あなたがたが予言者、聖見者、啓示を受くる者の職につくことはできない。これは神がなしたもうのであるから。

繰り返して申しあげる。神が天より啓示として示さない限り、だれも私たちの上に立つことはできない。

さて、もしシドニー・リグドン、ウィリアム・ロー、あるいはそれ以外の人を指導者として欲しいのであれば、喜んで迎えることができる。しかし、主の御名により申しあげる。十二使徒会と予言者ジョセフの間にはだれをも割り込ませることはできないのである。なぜだろうか。それは、ジョセフは十二使徒会の直接の指導者であり、この最後の神権時代にあつて、十二使徒会に神の王国の鍵を託していったからである。神権と神の間には糸1本通してはならない。

あなたが予言者を任命することはできない。しかし十二使徒会を留まらせその場で働かせるのであれば、王国の鍵は彼らと共にあり、教会のすべてを取りしきって正しい方向に持って行くことができる。¹¹

ブリガム・ヤングの話に続き、アマサ・M・ライマン、ウィリアム・W・フェルプス、およびパーレイ・P・ブラットが立って、ブリガムの話を示す演説をした。¹²

兄弟たちの話が終ると、ブリガム・ヤングは立って「十二使徒会を人々の大管長会として¹³」指示するよう挙手をあおいだ。賛成の挙手の次に、反対の挙手をとった。手をあげる者はだれもいなかった。

続く3年間、ブリガム・ヤングを長とする十二使徒定員会は、教会の管理評議会¹⁴として支持を受けた。1847年12月5日、使徒たちはオルソン・ハイドの家に集まって大管長会の再編成について話し合った。オルソン・ハイド

は、ブリガム・ヤングを教会の大管長に推す動議を出し、満場一致で賛成を受けた。ブリガム・ヤングは、副管長たちを指名する権能を与えられた¹⁵。教会の総大会が12月24日から27日にかけて開かれ、27日にはブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ウィラード・リチャーズによる大管長会が満場一致で聖徒たちの支持を受けた¹⁶。

教会の指導者の問題がかすかに持ち上がってきた時、ジョセフ・スミスは自分の死を予期して、指導者の交替に関する原則をうちたてておいた。これらの原則は、当時の出来事が示しているほどあいまいなものではなかった。

ジョセフ・スミスは、主から十二使徒を召すように言われた¹⁷。十二使徒は、モルモン経の三人の特別な見証者によって選ばれ、聖任されるはずであった。1835年2月14日の午後（ジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、およびフレデリック・G・ウィリアムスによる）大管長から三人の見証者が祝福され、それから3人は一緒に祈り、十二使徒を召す仕事にとりかかった。

ジョセフ・スミスの心には、十二使徒会が教会で持つ地位、権能、鍵に対して何の疑いもなかった。ことあるごとに、十二使徒の職を人々に知らせようとした。ジョセフは1835年3月28日に、オハイオ州カートランドで大管長会と十二使徒定員会に関する啓示を受けた。これにより、十二使徒との関係が明確にされた。主は特に、教会から選ばれた3人の管理大祭司が教会の大管長会定員会を構成し、キリストの特別な証人である十二使徒は、「三人の管理大祭司と権威と権能とを同じくせる」定員会を構成すると言われた¹⁸。

2年後の1837年7月23日、ジョセフは啓示の中で、神権の権能は大管長会と十二使徒会に付与されると知らされた¹⁹。さらに、予言者ジョセフ・スミスはこう言っている。「十二使徒会は大管長会以外の何ものにも従属しない。そして、私のいない所には、十二使徒会を管理する大管長会は存在しない。」²⁰

オルソン・ハイドは十二使徒評議会に関してジョセフの考えと警告を伝えている。「ある場所で、彼〔ジョセフ〕は60人ほどの人を前にしてこう語った。

『私の務めは終わろうとしている。私は少し道を譲ろうと思っている。自分の働きから休息をとろうと思っている。それは、1日の重荷と重労働を終えたから、少し道を譲って休息をとろうというのだ。そして肩から荷物をおろし、十二使徒たちの肩に背おってもらうのである。さあ、あなた方の肩を出して、この王国をかついで欲しい。』²¹

十二使徒評議会の会員が選ばれた時、年令順に前任順位が決められた。ブリガム・ヤングはトーマス・B・マーシュとデビッド・W・パッテン²²の次であった。デビッド・W・パッテンは後に殺され、前任使徒であり十二使徒会会長となったマーシュは教会から離れた。そこで、ブリガム・ヤングが前任使徒になったのである。²³ 英国のプレストンで開かれた十二使徒定員会の席上、ブリガム・ヤングは満場一致で十二使徒会会長に支持された。²⁴

こうして、予言者ジョセフ・スミスの死に伴い、十二使徒定員会の前任使徒すなわち会長は、教会の大管長とし

て教会員の支持を受けるという先例が確立された。この先例は、ブリガム・ヤングの後をついで、教会の大管長になったジョン・ティラーの言葉に見られる。

「かように私たちの地位は、……完全にはっきりとしたものとなったようである。私は十二使徒定員会において先任の地位を務めてきたが、この地位は十二使徒会が完全に理解しているところである。ヤング大管長の死により十二使徒会は大管長を引き受け、その会長である私に教会の大管長の地位が与えられた。²⁵⁾

この件に関してさらに明らかにしている言葉がある。

「教会の大管長が死ぬかあるいは職を退く時、啓示を受けて後継者を選ぶ責任は十二使徒評議員会に委ねられる。もしふさわしくあれば、先任使徒がその職を引き継ぐ。彼は、教会に付与されているすべての権能を有する十二使徒評議員会から聖任される。」²⁶⁾

大管長会が解散した場合、だれが教会の指導権をとるかという質問に対しウィルフォード・ウッドラフは意味あいの深い答えを与えている。「教会の大管長が死んだ場合、十二使徒はなぜ十二使徒会会長以外に大管長を選ばないか、その理由を知っていますか」と尋ねられて、彼は次のように答えた。

「なぜ選ばないか、私はいくつか理由を知っている。第1に、教会の大管長の死により、十二使徒会管理の権能を持つ。そして十二使徒会会長はその職務上、十二使徒会を管理しながら事実上教会の大管長となり、2人の副管長を管理する。」

第2に、教会の大管長が死亡した場

合、教会の大管長を任命するには、十二使徒会の賛成を得る必要がある。また、十二使徒会の大多数に、キリストの死に際した時の使徒たち、あるいはジョセフ・スミスの死に際した時の使徒たちとは別の、靈感によらない道を取らせようとするのは不合理なことである。」²⁷⁾

先例は確立されたとはいえ、神はある人を予言者に召したもうことをおぼえておくといふと思う。しかし、人々が地上の指導者になるべき人を決める。「あなたがたが予言者、聖見者、啓示を受くる者の職につくことはできない。これは神がなしたもうのであるから。」²⁸⁾しかし、「人は予言者、聖見者、啓示を受くる者となるかもしれない。しかし、それは教会の大管長と関係はない。ジョセフは教会の大管長であった。それも人々の声により。彼を教会の大管長に召したという啓示があるだろうか。神権の鍵は彼に委ねられている。だが彼が教会を管理するように召された時、それは人々の声によるものであった。人々の声とは無縁の神権の鍵を有しながらも。」²⁹⁾

1. リー・D・ウィットソー、「時の人、ブリガム・ヤング」P. 92
2. プレストン・ニブレー、「ブリガム・ヤング、人と業績」P. 52
3. 教義と聖約 124 : 108, 109参照
4. 教会歴史記録、第7巻 P. 223
5. 「」 「」 「」 P. 224
6. 「」 「」 「」 P. 225
7. 「」 「」 「」 P. 229, 230
8. 「」 「」 「」 P. 230
9. 「」 「」 「」 P. 230
10. エドワード・H・アンダーソン、「ブ

リガム・ヤングの生涯」

11. 教会歴史記録、第7巻 P. 232—235
12. 「」 「」 「」 P. 237—239
13. ジョセフ・フィールディング・スミス 教会歴史粹 P. 389
14. リー・D・ウィットソー「時の人、ブリガム・ヤング」P. 96
15. ジョセフ・フィールディング・スミス 教会歴史粹 P. 463
16. 「」 「」 P. 463
17. 教義と聖約 18章参照
18. 「」 107 : 23, 24 参照
19. 「」 112 : 30—32 「」
20. ダニエル・H・ルドロウ、「末日の予言者は語る」P. 215
21. 教会史誌 P. 180
22. ジョセフ・フィールディング・スミス 教会歴史粹 P. 181
23. プレストン・ニブレー「ブリガム・ヤング、人と業績」P. 23
24. S・ディルワース・ヤング、「ブリガム・あり……」P. 257
25. ジョン・ティラー、「福音の王国」P. 192
26. ジョン・A・ウィットソー、「神権と教会管理」P. 284
27. ダニエル・H・ルドロウ、「末日の予言者は語る」P. 214
28. 教会歴史記録 P. 233
29. ブリガム・ヤング説教集 P. 138

※H・パーカー・ブラウトは、現在教鞭をとるかたわら、インディアナ州パードゥー大学で教育心理学の博士号をとるために勉強している。1960年から1961年にかけて北西諸州の伝道部での伝道を経験しその後、ブリガム・ヤング大学で文学修士号をとった。奥さんとの間に2人の子供があり、インディアナポリス・ステーク支部、パードゥー・ワード部では七十人定員会の会長会で働いている。

感謝の心

ボニー・J・バベル

昨日、私は夏服を作ろうと思って数ヤードの布地と糸を買いました。無数に並ぶきれいな糸を眺めながら、私は糸が乏しくて針が宝物のようだった昔のことを思い出しました。

1946年の1月、父のフレデリック・W・バベルが主の予言者¹により、エズラ・タフト・ベンソン長老に同行してヨーロッパへ特別の召しを果たしに行くよう召された時、私はまだ生後3カ月でした。彼らの仕事は、戦争で焼け出されたヨーロッパの聖徒たちに救援物資を配り、そこで完全な教会のプログラムをたて直すことでした。

1年3カ月後に父は戻って来ましたが、この経験を通して父の人生はすっかり変わりました。父から第Ⅱ次世界大戦後のヨーロッパの事情を聞かされてきた私の人生も、やはり変わっていきました。自分が現在豊かに恵まれていることに気がつき、感謝の気持ちでいっぱいになります。

「ここにいる8歳以下の子供たちは全員前に来て下さい。私から贈り物をあげたいと思います。」

エズラ・タフト・ベンソン長老が話をしていました。かつては大都市であったドイツのハンブルグで、500人以上の聖徒たちに説教が終わったばかりのところで、1946年の春のことです。ハンブルグは、多数の爆撃を受けて崩壊寸前のところでした。無数の人々は飢えのために弱りきり、ただぼんやりと歩きまわるだけでした。顔や身体からは戦争の猛威がしのばれました。



戦争でやられた学校の大きな講堂の前に、60人ほどの子供が集まり、大戦後初めてヨーロッパの聖徒を訪れた使徒からお菓子をもらいました。家に帰った子供たちの中には、「お母さん、これ何？」と尋ねる子もいたほどです。

あなたが6～8歳で、お菓子がどんなものか知らないと思像してみてください。信じられますか。今は終戦後のドイツではないですから。

次にベンソン長老は、母親たちに前に来るように言いました。彼はひとりひとりに石けん1個ずつ配りました。こんな小さな贈り物でも、渡たされると感謝の涙を流している人たちがいました。出席していた人たちには、母親たちの深い感謝の心が伝わってきたものでした。

最後に、妊娠している母親と授乳をしている母親が前に来るように言われました。36人ほどの人たちが集まり、ベンソン長老は、大きなカリフォルニア産のオレンジを1つずつ渡しました。このオレンジは、その朝近くのブレーメンを去る時に、彼がある軍曹から手に入れたものでした。母親たちは、思いがけない喜びに信じられない様子でした。

前に来た母親の1人はベンソン長老がスーツケースから配給品を取り出す時に針と糸をしまうのを見つけて、私の父に話しかけました。父フレデリック・W・バベルは翻訳者として働いていた関係から、彼女と流暢にドイツ語を話せたので、オレンジの代わりに1巻きの糸と針をくれるようベンソン長老に頼んで欲しいと、彼女から言われたのでした。父が彼女の頼みを伝えと、ベンソン長老はただうなづき、涙でひとつとも言えないほどでした。

やがてこの母親は、糸と針を持って席に戻って行きました。彼女が中央通路にさしかかった時、扶助協会の会長が彼女を呼び止めて言いました。「姉妹、私たちにもその糸と針を貸して下さいますね。私たちもとても必要なんです。」

翌日、ベンソン長老と父は、ドイツのハノーバーの焼け残った古い校舎で非公式の集会に出席しました。2人が着いた時には、外はもう暗くなりかけていました。窓ガラスの割れている所にはボール紙がはってあり、中に入った2人が手に花を抱えて椅子に乗った子供たちを見た時の驚きようを想像して下さい。ベンソン長老と私の父が集会場の前方に進んで行くと、子供

たちは手にした花をまき、2人は美しい花のじゅうたんの上を歩いて行きました。集会を始める時には感激で胸がいっぱいになったそうです。

少しすると雨が降り出し、風も強くなってきて雨戸を閉めなければならなくなりました。外の光を入れる窓もなく、ほとんど真っ暗な中で集会は続けられました。しかしにわか編成の聖歌隊が強い靈感と熱意をこめて歌った時には、暗やみは去ったように思えました。

現在、私たち若者は新聞や本でよく不平や、犯罪、戦争、憎しみを目にします。ラジオやテレビは、すぐにでも私たちに関係のあるような混乱、苦悩を表現した番組あるいは報道をたえず流しています。私たちには、もっと愛や親切、理解、感謝を示したものが必要だと思います。

今でも、じゃがいもの皮をむいて捨てるたびに思い出します。

ベンソン長老と父は、当時フランスに占領されていたドイツのサルブルークェンで、教会員との集会を開いていました。聖徒たちは聖餐にあずかるため何週間もかかって1、2きれのパンを確保しようとしていました。当時パンは手に入らなかったため、パンのかわりにじゃがいもの皮を使うことに決めました。じゃがいもはなく、1かごの皮のために100ドル相当のお金を払わなければならなかったのです。後でベンソン長老は彼らに、主は彼らの捧げ物を受け入れて下さったとはっきり言いました。

大きなことに感謝することは簡単ですが、小さなことは見逃しがちです。私たちが養っていく必要があるのは感謝の心であることに気づいていないのです。

父はよく私たち家族に、主から与えられたすばらしい約束を言って聞かせます。

「およそすべてを感謝して受くる者には栄光を与えられん。而して、この世のものもまた彼に加えられることすなわち百倍よりも多からん。」

(教義と聖約 78:19)

※ボニー・ジューン・バベルは、フレデリック・Wとジューン・アンドリュウ・バベルの娘として生まれました。父親が大管長から召されてエズラ・タフト・ベンソン長老に同行し、ヨーロッパに特別な召しを果たしに行った時は生後3カ月であった。ブリガム・ヤング大学を卒業したボニーは最近、ニュー・イングランド州での伝道を終えた。

1. ジョージ・アルバート・スミス大管長

クリスマス

モルモン経 配布プログラム

12 月にはいつ、宣教師と会員はひとつとなりクリスマスモルモン経配布プログラムを行ないました。みんな非常に熱心で、1人1人の心の中には真のクリスマス精神が見うけられました。特別に包装されたモルモン経はクリスマスカードと共に教会員によってあるいは宣教師によって人々に配られました。

日本の町々でクリスマスキャロリングをしながら会員と宣教師はモルモン経を配布し、兄弟姉妹の熱心な参加によって多くの人々がはじめてモルモン経を手に入れました。12月だけで、会員と宣教師の配布したモルモン経の数は15,076冊にのぼっています。

このモルモン経配布プログラムを通して、日本伝道部の宣教師、会員は多くの祝福を受けました。この12月の月に、神が確かに生きてましまし、モルモン経が真実であるという非常に多くの証を聞くことができました。1970年度に、日本伝道部では918名のバプテスマがありました。ビルス伝

道部長の話では、日本中で2千名以上のバプテスマがあったということです。確かに、主はこの日本の地でなされる主のみ業を祝福しておられます。

教会員、宣教師がいつも赤と黒のモルモン経をたずさえて町を歩いている姿を目にします。それは彼らに神が確かに生きたもうことを、そして神が人々に語りたもうことを思い起こさせてくれるのです。モルモン経の看板もいたるところで見うけられますが、特にモルモン経に対する証、そこから得られた証は最も貴いものであります。



教会堂前にたてられたモルモン経



会員と宣教師によるキャロリング風景



宣教師からプレゼントを受ける求道者



モルモン経の説明に耳をかたむける人々

日本東伝道部だより

☆新役員の紹介

去る十二月五・六日の二日間仙台で東北地方部大会が開かれました。仙台支部が今建築中ということもあって「主の家」というテーマの力あふれる大会でした。

本大会で伝道部役員として新たに次の兄弟・姉妹が任命されました。

伝道部教育委員

阿部順夫兄弟

// YW I A 第1 副会長 上野裕美姉妹



長老に召された兄弟

(左から) 東(八戸) 高橋(石巻) の両兄弟

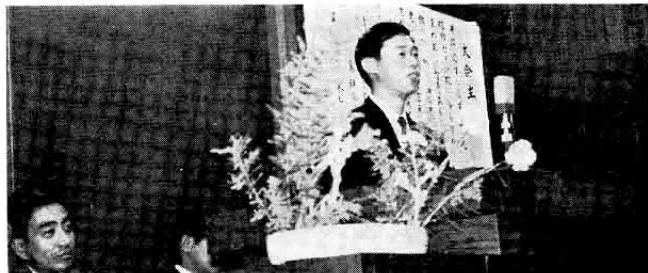


神 権 指 導 者 会

また今大会で八戸と石巻の伝道所から二人のメルケゼデク神権者が誕生しました。



地方部宣教師としての証をのべる工藤姉妹(仙台)



建築で得た強い証をのべる斎藤長老

☆札幌東伝道所新設される

札幌支部は、ますます躍進の一途をたどっていますが広範囲な伝道地域をかかえて札幌支部一ヶ所では、福音伝道も十分に行なうことが出来ませんので、この度12月7日によ

う札幌月寒に札幌東伝道所が新設されました。現在6人の宣教師が伝道しています。

☆日本東伝道部機関誌

「さざなみ」発刊

日本における伝道活動は、ますます活発になり、回復された真の福音は、あまねく日本全土に広まっております。私たちは、主の御腕がこの地にさしのべられていることを感謝の念をもって理解しております。

このような時期にあつて、会員の信仰を強くし、指導者の育成の助けとなり、宣教師の働きを助ける上で、各伝道地の活動状況やニュース等を内容とする、伝道部機関誌「さざなみ」を発刊することにいたしました。すでに発刊第3号を見



るに到りましたが、もし日本各地の伝道部の了解を得られましたら、日本東伝道部のみにとどまらず、日本中の会員のものとして育ててゆきたいと念じておりますので、広く皆様方のご意見を心からお待ちしております。

日本西部伝道部だより

日本西部伝道部の歩み

神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され、福音はここより転じ行きて世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて、ついに全世界に充ち満つるが如し。

主は日本の西部にもみ手を伸ばしておられることを感じることができます。昨年の三月新伝道部が組織されて以来、日本西部伝道部はその名の示す通り、開拓者の如くつき進んできました。宣教師の努力と万博を通じて、兄弟姉妹たちが続々と改宗されています。彼らは確かに予め目的があつてこの世代にこの西部に特定の環境に生れ出るよう、この時までとっておかれました。そしてこれまでの経験が有形無形の準備であつたと感じ取ることができるのです。彼らは西部伝道部が組織され、伝道が拡大され、主のみ言葉があまねく伝わる時の指導者となるべき人であらうと思われるのです。

現在 130 余名におよぶ宣教師と各地の指導者たちは文字通り神の武具を身にまとい、西部の開拓にあたっています。

本号では、日本西部伝道部が活動を始めた昨年四月から十二月までの統計記録を紹介し、同時に躍動を開始した伝道地を含む集会所の所在地を紹介します。

昨日よりは今日、今日よりは明日の進歩、これが西部伝道部の支えなのです。

教会員	2,787	伝道地	17
うち外人	913	メルケゼデク神権者	300
非教会員	1,900万	うち外人	224
地方部	5	アロン神権者	414
支部	13	うち外人	187
宣教師	131	メルケゼデク神権の授与	12
バプテスマ	305	アロン神権の昇進	101
うち外人	57		

普天間	沖縄宜野湾市字野嵩区328	Tel. 098-2229
那覇	沖縄那覇市崇元寺町1-128-20	78-4411
名護	沖縄名護町字名護740-3	050-3165
首里	沖縄那覇市首里千中町1-22-1	
鹿児島	鹿児島市下荒田町3	0992-58-1693
宮崎	宮崎市西池町1-23	0985-24-8953
熊本	熊本市出水町国府2011	0963-62-5512
大分	大分市都町3-5-14	0975-24-3452
長崎	長崎市西山町1-95-1	0938-22-1674
佐世保	佐世保市山手町14-20	0956-24-7516
福岡	福岡市浄水町46	092-52-8753
福岡Ⅱ	福岡市七隈北新町1206-8	092-53-5556
北九州	北九州市小倉区魚町3-77	市岡ビル3F 093-55-4659
北九州Ⅱ	北九州市八幡区黒崎町1-13-7	栄町ビル405
下関	下関市汐入町22-5	
柳井	柳井市字尾上3769-1	082-022-2424
広島	広島市高須2-7-29	0822-71-5309
広島Ⅱ	広島市宝町8-12	0822-41-6792
呉	呉市西中央町5-5-18	
松江	松江市上乃木町字王子坂295-3	0852-21-5364
福山	福山市三吉町1-78-1	



ぼくらの建てた宣教師ハウス



京浜地区は日本で最初に教会堂建設がなされ、東京ワード部を残すだけである。しばらく建築の槌音から遠ざかっていたこの東京に、昨年の九月以来久しぶりに土くさい臭いと槌音が鳴りひびき始めた。東京第5ワード部の宣教師ハウスの建築がそれである。ステーキ部組織になって、初めての建築宣教師たちが、そ

の宣教師ハウスの完成を目指し働いている。一月現在その建築工程の90%を終了した。

この汗と信仰の結晶には、池永敏晴（東京第2ワード部）、南部信正（同第3ワード部）、的場正弘（同第5ワード部）、相馬清隆（横浜ワード部）以上4人の兄弟たちが従事している。

昨年8月26日召された、池永兄弟（長老、4人のリーダー）、一見やさ男風の美少年だが、彼は言う、建築宣教師になってからは、神について漠然としていた事柄が、建築の祝福を受けてだんだんとはっきりしてきた、それが証となり信仰の強さになったと。

南部兄弟（祭司）彼はゲバ学生だった。その彼が今ヘルメットのかわりに神権の帽子をかぶり、角材のかわりに金づちを手に9月1日以降、がんばっている。彼もまた証をする。考えさせられる大人になったと、今社会に目を転ずる時、ゲバ時代とは違い教会の知識で余裕をもって見る事が出来ると。

的場兄弟（祭司）池永兄弟と一緒に8月26日召され、今までやったことのないことが本当にうまくゆくのかと思って出発したが、自分の力以上に力が出て建築されていく建物を見て、教会のことをよく知ることが出来たと言う、仕事を与えられた時が一番うれしいとのこと。

相馬兄弟（教師）昨年9月15日以来の建築宣教師生活はバプテスマを受ける前の自称、乱れた生活とは見違えるばかり、教会の生活で本当に喜んだのは自分自身もさることながら御両親が喜んだとのこと。今教会のよさを肌で感じるしあわせを味わっていると言う。

この四人の兄弟をわが息子のように思い、やさしく指導しているのが「とうちゃん」ことオースン監督だ。西部劇映画の画面から飛び出して来たようなたくましい風貌の持ち主である。だがこの男らしさの中に繊細な心も秘めている。彼はクリスマスプレゼントに一人一人柄の違うネクタイとネクタイピンをプレゼントしたのである。そして4人の「息子たち」は異口同音に言った。あのアメリカン・ハンバーグはおいしかった。自宅へ食事招待したりして指導するオースン監督の下で働く4人の建築宣教師たちの成果は、これからステーキ部が始まるであろうステーキ部センター、東京ワード部建設、そして将来の神殿建設への前哨戦とも言えるだろう。



結婚生活のマナー

リチャード・L・エバンズ

2世紀半前、リチャード・スティールはこう記している、「互いの慰めとなり喜びになろうと……大勢の中から選び選ばれたふたりは、その行為の内に、お互いの弱さや不完全さをしんしゃくしつつ、ユーモアと優しさ、思慮、寛容、忍耐、明るさを持続けるという責任を負っているのだ」。これこそ、結婚に関して心得べきことの総括、もしくははじまりである。結婚は浅薄な考えによりなりたつものではなく、そうあるべきでもない。唐突に決心して急ぐものではなく、またそうあってはならない。結婚は、変ることなき心、義務を行なう献身、現実をみつめ、問題を解決し、働き、与えること、正しい望みを持ち、家庭を築き、子供を育て、人々や逆境の時に対して自分を順応させることを必要とする。結婚は、毎日、豊かな心と生き生きとした霊と完全な正直とを必要とする。たしかに、結婚生活にはマナーがある。マナーと親切と礼儀がある。他人と会ってもいやならば別れることができる。友人とは時々会うだけであろう。だが結婚は、最も密接な間柄である。結婚する人々が共通の信念、共通の目的、共通の関心や理想をいだき一致して子供を教えなければならない。別々の方向へ子供を引き裂き、混乱を招き、信仰を失わせ、時には家族をばらばらにする悲劇を避けることはいかに大切なことであろうか。家族が永遠であることを思えば、結婚より重大な決定は他にあるだろうか。自分の最上の状態を表わす場は、家庭以外にあるだろうか。家庭でこそ、親切と礼儀と正直と尊敬を示すべきである。家庭でこそ、最も清らかに、思いやり深くあるべきである。家庭こそ、自分の最善を表わす場でなくてはならない。

* リチャード・スティール卿
1672—1729、英国の随筆家、劇作家

聖徒の道

1971年2月20日発行

振替口座 東京16226番

発行人兼編集人 ウォルターR. ビルス

発行所 東京都港区南麻布5-8-10

末日聖徒イエス・キリスト教会 電話(442)7459

印刷所 太陽印刷工業株式会社

定価 100円

予約 一年間 1,000円 (外国4ドル50セント)

電報受信略号 「トウキョウ」 マツジツ